
TOW オリジナルマイソロジー

暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TOW オリジナルマイソロジー

【Nコード】

N1832R

【作者名】

暇人

【あらすじ】

人々が生を営む広大な世界「グリトニル」

ここは数えきれないほど枝分かれした世界樹の派生した世界の1つだが、イレギュラーな世界でもあった。

“世界樹が2本”という歪な世界。

少年少女達は何を思い、何を感じて剣を持つのか……

創世と終焉の後で（前書き）

今回はプロローグです。

短くて申し訳ないですが、仕様です。

さて……興味を持ってくれた方々に感謝を。

創世と終焉の後で

数多に存在する世界

その根源となつた世界

その世界を基に生まれ、それぞれに散つた世界

これから紡がれる物語は、そんな世界の内の1つ。

「グリトニル」と言う名の世界だ。

この世界は実に不安定で、脆く、儚かった。

だからこそ私はここを「美しい」と感じ、守護する彼らを「誇り」に思っている。

なぜそこまで言えるのか、とコレを読んだ君達は思ふのだろうが、それには理由がある。

このグリトニルと言う世界は他の世界とは大きく違っていた特徴的な世界だった。

他に例を見ない、“世界樹が2本”と言う異例中の異例。

実に興味深いとは思わないかね？

だから私は世界の真実を求めていた彼らと行動を共にしたのだ。
他の誰でもなく、私達自身の「知りたい」という欲求を満たす為。

そして、彼らの選んだ道を見定める為に。

これから君達が見る事になるのは、世界の記憶だ。
このグリトニルと言う世界自身が記憶したありとあらゆる情報の波
を漂ってもらいたい。

そして、最後に聞かせてはくれないだろうか。

彼らの選んだ道を、君達ならどうしたのかを。

彼らの戦いの道程で、君達を感じた全ての思いを。

有限の生命だからこそ持つ特有の輝きが。

限界の無い、カタチの無い存在だからこそ繋いでいける記憶が。

きっと君を新しい世界へと導いてくれるはずだからね。

著：ニアタ

創世と終焉の後で（後書き）

次回から第一話が始まります。

今作ではあとがきをキャラクター達がジャックしていく予定です。

つつーわけで最初はこの人？

ニアタ「やあ。君のような駄作者と違って私は忙しいんだが？」

いきなり酷いよニアタ……せつかくしょっぱな出番あげたのに。

ニアタ「カノンノいるところ我らあり。出番がないなどあり得ないのだよ！！」

キャラ変わってるし！？

ニアタ「では諸君、またお会いしよう」

1・聞こえた声（前書き）

遂に始まりました、オリソロ。

主人公の設定は悩みましたね……

世界観もなかなか困ってはいましたがなんとか大まかにできました。

では、どうぞ。

1・聞こえた声

雲一つなく綺麗に晴れた空の下、今日もお船は空を飛ぶ。

「うひゃー、やっぱり甲板で外を見るのって慣れないよぉ!!」

「まーないとは思っけど一応言っとく。落ちんなよ?」

「リッドはポヤヤンとしてるくせに心配性だね。大丈夫大丈夫♪」

上空特有の強風に赤い短髪を流されつつも腰に手を当て欠伸をする少年、リッド。

そんな彼に心配されていたのは、彼の頭1つ分ほど背が小さく、かつ桃色のお尻まであろうツインテールを持つ少女だった。

「そうですよ、リッドさん。この船、ボクのバンエルティア号はマナの力で甲板から落ちる事はありません。」

ソレはこのギルドの発足当初から説明してるじゃないですか」

「んあ、そうだったか?」

「ぶぶぶ、リッドってば人の話聞かないんだね」

「笑うところじゃないだろ、それ」

少女の言葉に続くように安全性を説明する言葉が聞こえた。

声の主は褐色の肌には海賊風の格好、そして一番目立つ大きな帽子をかぶった少女、このバンエルティア号の船長であるチャットだ。

「ねえチャット、リッドはどうでも良いんだけど今日の依頼は来て無いの？」

「おい、どうでもいいって酷くな（ry）」

「残念ながら無いですね。このギルドを始めてから実はまだそんなに経っていないので」

「おいコラ、無視は酷くな（ry）」

「じゃあ船内の掃除でもしようかなあ。まだ全体を把握して無いから案内してよ！ー」

「ええ、構いませんよ。じゃ、行きましょうか。」

このギルド『アドリビトム』の最初の加入者である貴女になら喜んで。リーリアさん」

「ボクに任せとけ」

リーリアと呼ばれた桃色ツインテールの彼女は薄い胸をポンと叩いて颯爽とその場を立ち去った。

「キール……早く戻ってきてくれえ」

今日も散々な扱いを受けたリッドは半泣きで甲板に寝ころび空を眺め始めるのだった。

TOW オリジナルマイソロジー
第1章―世界の悲鳴― 1・聞こえた声

「やつほー、エミル。今日も情けない顔してるけど、そんなんじやまたマルっちにド突かれるよ?」

「情けない顔とか言わないでよ、気にしてるのに……リーリアは掃除だよね。この船の中は分かる?」

「自覚はあるんだね。船はチャットに案内してもらったから覚えた!」

モップとバケツを持って廊下を歩いていたリーリアは見つけたエミルの頬をモップの柄で突きながら喋る。

もう慣れてしまったのか諦めたのかは定かではないが、気にする事無く彼は彼女の心配をした。

当然ながらリーリアは自慢するかのように満面の笑みで覚えた宣言。その姿に自然を笑顔を見せるエミルは頑張っ、と言って去って行った。

「さーて、掃除掃除と……とおりゃあああああああ……！！」

会話を終えたリーリアは早速モップを構えて廊下を磨き始める。
小柄な彼女には他の人達には標準的な大きさのモップでさえ扱いが大変な為、いちいち気合を入れているらしい。

「魔神剣、魔神剣、魔神剣、魔神剣、魔神剣、魔神剣……！」

ホア~~~~！！ と何か酔っているような動きでモップを動かしていた矢先

――聞いて、世界樹の声を――

「うにゃっ！？」

頭の中で一瞬声が響いたような気がした。

「世界樹の……声？ ってまたあ、木の声って擬人法じゃあるまいし……」

空耳だと思って流そうとしたが、妙に頭に残ってしまう。

それが幻聴などでは無いという自覚をもたらしてしまったのか、
彼女はモップとバケツを片付けてホールにいるであろうチャットの
もとへと向かった。

「どうしたんですか、そんな血相を変えて」

「チャット……お願いがあるんだけど」

「なんです？」

彼女は予想通りホールにいた。

このアドリビトムのギルドマスターであるチャットは意外な事に管理職だけでも多忙である。

だから滅多にこのホールから移動しないし、自分からは船を出ない。

「外出許可をもらえないかな？」

「どうしてです？ 依頼も何もないでしょう」

「んーと……それはだね、修行をしたいのさ」

正直に言えば間違いなく頭の心配をされる為誤魔化した。
いや、まあ自分に記憶が無い事を考えればある程度は考慮してくれ

るだろうけれども。

「お1人ですか？ でしたら許可できませんね。せめて他にお2人ほど一緒にないと心配です」

「他に2人メンツがいればいいんだね!？」

「え、ええ。まあそうですね」

「逝ってきます!!」

「漢字が違いますよ!？」

人数的な問題など一瞬で解決する。

そう考えたリーリアは一目散にその場を離れ船内を駆け巡る。

そして見事に10分程度でお供を2人引き連れ現れた。

「なんでよりもよって僕かなあ」

「ホントホント、暇かって聞かれて暇って答えたら連れてこられてさあ」

「エミルとイリア!! どう、これで問題ナシ？」

「（人選的には超心配ですけど）……問題は無いでしょうね。あま

り遅くならないでくださいよ?」

「うん」

「ではパーテム王国近辺にある『アイルーナ大森林』で貴方達を降ろします。

帰還用の通信機を預けますから、帰る時はそれを使って呼んで下さい。では、ご武運を」

「行つてきます」

こうしてリーリアは修行の名目で初めてバンエルティア号を降り、この世界の大地に足をつける事になった。

.....

『アイルーナ大森林』

この森はパーテム王国と言う国の領土の東側の端に広がっている森だ。

その前にこの世界の仕組みについて説明しよう。
まず最初に、このグリトニルと言う世界は大きく分けて3つの国に分かれている。

科学技術の発展に特化した「グレルシール帝国」

魔法文化が発展した「エルナ王国」

その中間地点で中立立場の「パーテム王国」

この3つの内、現在グレルシールとエルナは戦争状態にある。戦争の理由は当然ながら、この世界の富の源泉である“マナ”の奪い合いだ。

世界樹が2本と言うこの世界の構造は極めて難しい。

グレルシールとエルナ。マナの恩恵を受けられるのはどちらか片方だけなのだ。

しかもその恩恵を受ける国は一定間隔で入れ替わる。

現在の調査によって、おそらく50年おきにマナの満ちる国が入れ替わるだろうと考えられている。

ちなみにパーテムは両国の中間に位置する為国土に世界樹の根そのものが少ない。

その代わりになるのだろうか、移動に影響される事無く少量ではあるが安定したマナがある。

話を戻そう。

現在はグレルシールが圧倒的な戦力でエルナを押しつけている。

そもそもこの戦争を仕掛けたのはエルナ王国だ。

マナの恩恵がともに受けられずにいた民の不満が爆発し、王家の家臣達の暗躍もあり国王の意志とは反して勃発した戦争。

勝てる見込みの無い、意味の無い戦いを止められず現在の国王イザーク・ケルヴィンは病に倒れた。

本来ならばとつくに終結しているはずの戦争は、理由も無く今もなお続いている。

そしてこのアイルーナ大森林だ。

パームの東端に広がるこの森は逃亡するにはうってつけの深い森。その代わり奥には強力な魔物もいるらしく普段ならば絶対に近づく事は無いと言われている。

「で、なんでこの森を修行場所に選んだわけ？」

「いやあ、ぶつちやけていい？」

「リーリア、嫌な予感がするのは僕だけかな？」

「いいからさつさと答えなさい。でなきゃその能天気な頭打ち抜くわよ」

「ぶぶ、物騒だよお！？」

美味しそうな肉が転がってるわけでもなく、安心安全な場所でも無いここに連れてこられたイリアとエミル。彼女らはぶつぶつと文句を言い始めていた。

「なら言っね。ホントは修行じゃなくて探し物をしに来ました！！」

「さ、帰ろうか」「

ぶつちやけた瞬間にイリアとエミルは帰る支度をする。

「声が聞こえたんだ！！　ボクの頭に世界樹の声を聞け、って言葉が聞こえたんだよお！！」

「んな訳ないでしょうに。病院行つとく？」

「気のせいだよ。怪我しない内に帰ろう？　暗くなるとこの森は危ないって噂なんだし」

当然ながら信じてはもらえない。

ソレが悔しかったからなのか、2人の態度に腹が立ったのかイリアは1人で森の中へと走って行ってしまう。

「ええ！？　なんでそんな無茶な……」

「知らないわよ、ほつときなさいエミル。ああいうバカは一度痛い目にあわないと分かんないわよ」

彼女の行動に驚き追いかけようとしたエミルをイリアは止める。

イリアの目は、優しさではなくイリアを憐れんでいるような目だった。

「それでも、心配なんだ。友達がいなくなるなんて……もう嫌だから。ごめん、僕行くよ」

それでもエミルは彼女の制止を振り切って追いかけるように森へと入ってしまった。

1人残ったイリアはしばらく頭を掻いて唸っていたが諦めた。

「全くもー、負傷者の手当では誰がすると思ってるの！？　ルカの面倒で精一杯だったのー！」

結局根は世話焼きな彼女。

ガツカリしつつ自身の武器である二丁拳銃を携えて森の中へ入って行った。

1・聞こえた声（後書き）

リーリア「どうだ、ボクが主人公なのだ!!」

暇人「まあわかるとは思うけどこの子女の子ですからね?」

エミル「豪快な子だね」

リーリア「なんだとう!!　ボクはボクらしく普通にしてるってば!!」

暇「あー、はいはい。と言うわけでみなさん、こんな主人公ですが今後ともこの作品をよろしくお願いします!!」

エミル「なんかしょっぱなからグダグダみたいでごめんなさい……」

暇「じゃ、今後恒例になるであろう一言をどうぞっ!!」

リーリア「るえ?　そんなのあったっけ?」

暇「今決めた」

リーリア「まあいいや。じゃ、いくよ」

リーリア「未来へ導け、ココロの光!!　夢見る翼!!」

2・アホの化身（前書き）

リーリア アホの子 元気な子

2・アホの化身

頭が痛む

—急いで—

あの声ははっきりと聞こえる。

優しくて暖かい。胸の中にまで浸透するような心地よい空気の振動。

だというのに、声が響くたび頭が割れそうに痛む。

—私は、貴女にしか頼めないから—

「う……うるさーい！！ 頭痛くなるから喋るなよおー！！」

半泣きである。

頭痛薬を持って来ればよかった、などと考えていたら正面に見た事の無いものが動いていた。

「うつうつ……邪魔しなでってば。いいからどけえー！！」

だがリーリアにはそれがなんであろうと関係ない。
一刻も早くこの頭痛から解放される為に急がなくてはいけないのだ。
邪魔をするのなら倒すしかない。

「やあっ！！」

持っていた剣「サンマ」でその青く丸い奴を斬る。

「……ってサンマあああああああああ！？」

自分はどれだけ準備にあわてていたのだろうか。
思わず持ってきた装備に自分で驚愕するリーリア。

「てか冷たっ！！ 冷凍サンマ冷たっ！！」

もう冷静さなどない。いや、最初からどこにもない。
アタフタしている間にその青い奴……いわゆる『オタオタ』は近づいてくる。

「くくく、来るなあ！！ えーと、えーと、え~~~~~と~~~~
~~~~ん~~~~ライトニング！！」

混乱していた頭の中、ふと浮かんだ言葉をマナを込めて叫んでみた。すると振り下ろした右手が号令になったのか一筋の雷がそれを焼き払った。

「……おお！？ さすがボク……凄いぞ、強いぞ、カッコいい！！」

冷凍サンマを掲げ勝利ポーズ。

「……って、だから冷たいよサンマ！！」

そして自分でツッコミ。

そんなバカバかしい事をしている暇は無いと思い出したのか再び走りだろうとした時だった。

「……へぶしっ！？」

何かに躓いて見事顔面から地面に激突。大地とキスするポーズになった。何事かと思って足を見てみればどんどん絡まってくる木の根、木の枝。

それを辿って見上げた先には、まるで樹木だとも思ってしまうような魔獣――トレント――がいた。

「サンマじゃ無理――――っ!!」

成す術無くその小さな体を木の根、木の枝で蹂躪されていくリーリア。

服の中をもぞもぞと動き回られる為くすぐったくてしょうがない。

「にやははははは、なは、あふえ、あ、やんつダメだよそんなトコ……うひゃひゃひゃひゃ!!」

ああ、笑って死ねるならそれもいいかなあ

とか思ってた矢先

「瞬連刃!!」

彼女に絡みついていたモノは全て斬り落とされた。

おかげで地面にドスンと尻もちをついてお尻をさするリーリア。

「はーはー、はふう。何事!？」

息を整え跳ね上がるようにきよろきよろと辺りを見渡す彼女に罵声が飛んだ。

「勝手に先行して何やってんだよ、このバカが!!」

声の主を見れば、金髪に赤い目のエミルが剣を構えて立っていた。

「い、ごめん……で、どちら様？」

「喧嘩売ってんのか？」

「割と本気で」

「泣かす」

「orz」

そんな単語のやり取りをしている内に周囲をトレントをはじめオタ、マンドラゴラに囲まれてしまった。

「ったくめんどくせえ。テメエ帰ったら覚悟しとけ」

「ほえ……何するつもり？」

「この程度、俺1人で十分だ」

うだうだ言いつつもエミルは自身の武器「ロングブレードSR」を握り直し1人で魔物の集団に飛び込んだ。

「鳳翼旋!!」

天を裂くかのように舞い、剣でトレントの枝を再び切り落とす。

「まだまだあ！！ 空牙衝！！」

無数の衝撃破でトレントを撃破したエミルは着地と同時にマンドラゴラを見る。

よく見れば足元には紫色の魔方陣が広がっていた。

（マズイな…… ありゃ、ネガティブゲイトか！？）

心の中で舌打ちしたエミルだったが判断は鈍らない。

「テネブラエ、いるんだろう！？ なんとかして時間を稼げ！！」

《ホント、人使いが荒い騎士様ですこと…… 私人じゃないですが》

するとどこからか中年のオッサンを彷彿させる声が響く。

リーリアは痛む尻をさすりながら立ち上がり援護しようとしたのだが、間に合わなかった。

《デモンズランス！！》

突如空間から紫色の槍が降り注ぐ。

その槍の雨によってエミルが手を下すまでも無くマンドラゴラは消滅した。

《これで満足でしょうか？ エミル様》

「上出来だ、テネブラエ。引っ込んでいいぜ」

《はい（あーあ、せっかくの出番だったのに）》

自信ありげな声が響くと、いつの間にか切り刻んだオタオタを踏みつけたエミルが答える。

テネブラエの気配が消えたかと思えば、エミルはリーリアに近寄る。

「けがはないよな？」

「え、あ……うん」

「よし。で、どこに行きたいんだ？」

ブレードを鞘にしまい、頭を掻くエミル。

先ほどの一言は、彼なりの心配だったことに気付いたリーリアはニヤニヤと頬を緩ませた。

「にゅふふ……エミル、ありがと。マルタの言つとおりカッコいいじゃん」

「うつせー！！いいからお前はどこに行きたいんだよ。1人で飛び出したからにはあるんだろう？」

エミルの言葉に一瞬詰まるリーリア。

当然ながら記憶も無く、頭に響く声の導くまま走っていたのだから目的地などない。

「えと、えーとー……」

答えたくても答えられないもどかしさに困っていた時だった。

「……………チッ、まあ今日だけは守ってやるからさっさと行けよな……リーリア」

「あ……………」

エミルのその優しさは、何も言えないリーリアにとっては嬉しい事だった。

「ありがとう、エミル!!」

つい気持ちが高ぶって走り出した彼女を彼も追いかける。嬉しくて笑顔なリーリアを追いかけるエミルだったが、彼の表情は微かに緩み、微笑んでいるようだった。

しかし、次の瞬間彼女は立ち止まり振り返る。

「優しい人って好きだなあ。好きになっちゃうゾ？」

「寝言は寝て言え、さっさと走れ」

「あゝん、もうエミルのいじわる〜!!」

なんでもない内容だったから彼はスルーして走ることにした。

……………

そんな光景を見ていた人が一名。

「なによ、エミルの奴……ちゃんと護衛できてるじゃないの」

ギリギリと歯をこすらせ掴んでいる木を蹴り続けるイリア。  
どうやら彼女は彼女で心配していたらしい。

「ルカと同じ臭いがするかと思えば豹変して戦うし、なんか優しい  
だし……調子狂うわ」

とかいいつも自分のヒネクレ方にも少々ガツカリしていたイリア。  
するとみていたリーリアとエミルが動き出す。

「……………」

エミルだけでも十分な気がしていたイリアは帰ろうと背を向けるが  
足が動かない。

「あゝもゝゝ……！ あの子らの保護者はあたししかいないでしょ  
うが」

結局イリアは彼女らの後を追いかけることを選択した。

……………

―感じて―

奔っている間にも頭痛は酷くなる一方。

「アイシクル!!」

頭に浮かんだ言葉を、体に満ちるマナを練り上げて放出しながら叫ぶ。

行く手を遮るオタオタを凍らせ、それをエミルが砕いていく。

「おい、少しペースが早いんじゃないか!？」

「ダメ、止まらないで!!」

―あと少しだから―

先ほどまで変わらなかった森の景色が、少しずつ変わり始めていた。少し先に、開けた空間が見える。

「これでどうだああああああ!!!!」

最後のマンドラゴラ。

無意識なのか、ファイヤーボールを飛ばしながらリーリアは冷凍サ

ンマで斬りかかる。

「魔神剣・双牙!!」

2つの衝撃破が地面を走る。

直撃したマンドラゴラは燃えていたにもかかわらず切り刻まれ消滅した。

そして長かった森を抜けるとそこには――

「祠……?」

「世界樹の根が集まって木みたいになってんのか……で、祭ってる  
っつーわけだな」

その空間だけ木々が避け、その中心には太く堂々とした樹木に見える世界樹の根があった。  
根の周りには祭る為祠が置いてあり、外界の音が聞こえない為神聖さが増しているように思える。

既に頭痛は終わっていた。

《ようやく……来てくださったのですね》

「だ、誰だっ!？」

「大丈夫、警戒しなくていいと思うよエミル」

突如響いた女性の声に驚いたエミルは腰を落とし剣を構える。  
だが先ほどから聞こえていたリーリアは警戒する事は無いと知っていたから冷静だった。

《ここは、この世界にある2本の世界樹の根の絡み合う末端の地。  
貴女方人間は『狭間の根』と呼ぶみたいね》

「狭間の根……そうか、ここがそうだったのか」

「え、どういうこと？」

《ここは多くの精霊達が集う数少ない聖なる場所。汚れの無い純粹なマナに満ちたこの空間は精霊にとって居心地がいいのです》

「俺の契約したラタトスクって精霊もここに来たりするんだろ？」

《……嘘をつく必要はないでしょう？ エミル・キャスタニエの身体に宿り戦闘を引き受ける人格として存在している変わり種、センチュリオンの王ラタトスク本人が何をおっしゃるやら》

その女性の声が響くとエミルは顔をしかめ黙る。

「エミルに関しては後で問い詰めるとして……ボクをここに呼んだのは君？」

《ええ。私の声に反応を示してくれたのは貴女だけでした。世界は数年前から危機に瀕しています》

突然世界の危機などと言われ唖然とする2人だったが女性の声は止まらない。

《グレルシールとエルナという2つの国の衝突。ただの戦争だと思う人々も多いですが、そうではないのです》

「なにが違うの？」

《この世界の歪さが原因となって起きた戦争ですが、世界は戦争のせいでマナの均衡を崩しています》

「崩れるとどうなるの？」

《2本の世界樹が枯れ、マナが生まれず負の感情が世界に満ちてこのグリトニルと言う世界が滅ぶでしょう》

彼女の言葉にリーリアもエミルも、遠くから話を聞いていたイリアも絶句した。

今までただの戦争だと思っていたものが、実は世界を滅ぼす原因になりうると知ったのだ。

黙っていられるはずがない。

「呼んだからには、ボクになにをさせたいの？」

《生まれたての貴女は知らないでしょうが、そちらの彼は知ってい

るんじゃないかしら》

「生まれたて……？」

「まさか、最近あちこちで起きてる魔獣の変化や狂暴化、地形の変化とかじゃないだろうな？」

《その通りです。戦争の背後に付きまとうその原因を探し、解決してほしいのです》

「でも、ボクは何もできないよお」

リーリアの自身の無い呟くにその声は少し揺れた。

《そんな事はありません。貴女は私の声を聴き自らの意志でここへ辿り着いた。

周囲の人々を動かし、必要に応じて行動した事は貴女が起こしたのですよ？ 自信を持ってください》

「だが、そいつは危険が付きまとうんじゃないのか？」

《確かに。ですが、先の事はわからないし、なんとなくですが貴方たちなら大丈夫な気がするのです》

彼女の声は確かに嬉しそうだった。

だが懇願し、押し付けるような意志も感じられない。

迷っていたリーリアだったが、記憶も何もない自分だからこそ何か大きな事をしてみたいとも思っていた。

「どこまでできるかわからないけど、ボクはボクのできることをしたい。」

みんなには迷惑かもしれないし、危険な目にあうかもしれない。……でも、ボクにしか頼めないならもちろん引き受けるよ!」

胸を張り右手でポンと叩きながら祠に向かって叫んだリーリア。すると次の瞬間暴風が起き、思わず目を伏せる。

次瞼を開くと祠の前には女性が浮いていた。

ピンクのロングストレート

純白のドレスを思わせる清楚なワンピース

白く透き通った肌

ゆっくりと開かれた瞼の奥に煌めく翠色の瞳

「よくぞ受けてくれました。私は世界樹の旅を見届ける存在……貴女の名前は？」

「リーリア……リーリアだよ」

「リーリア……貴女に、私の力の一部を授けます。これからの貴女達に、世界樹のご加護を」

「ま、まって!!」

彼女はリーリアに名前を訪ね、両手を組んで祈りをささげると何も告げずに姿を消した。  
それからは何度呼びかけても返事が無かった。

「どうやらお前の用事つてのは済んだみてえだな」

「うん……」

突然終わってしまった対話に落ち込んでいたリーリアだったが、エミルと共に来た道に戻る。  
そしてその広場から森に入ろうとした時だった。

「ツインバレット!!」

頭上で無数の銃声と魔獣の叫び声、ついでに聞き覚えのある声が響いた。

驚き上を見上げると落ちてくる二ワトリのような魔獣ハチエツトピークの残骸が降ってくる。

「イリアか」

「やっぱりツメが甘いわね。あんなぶっ飛んだ話聞いて安心してんじゃないわよ」

「聞いてたのっ!？」

エミルは予想していたらしく姿を現したイリアを呼び、リーリアは先ほどの話を聞いていたことに驚いていた。

「あたしがいないとホント危なっかしいったらありやしない。さつさと帰って報告するわよ。今後のアドリビトムの方針を決める重要な内容なんだから」

「あ、うん」

「この心配性が」

「うっさいわね」

「ケ、ケンカはダメだからね？」

すっかりイリアのペースに乗せられ、帰還するためにバンエルティ

ア号と連絡をとるリーリア。

その横でけんか腰になっていたエミルとイリアに苦笑しつつも、リーリアの表情には満足感があつた。

## 2・アホの化身（後書き）

さて、2話目にしていきなりの問題提示。

そしてエミルさん正体発覚www

イリアが思ったよりも難しくて出番が減った……orz

その分エミルが頑張りましたので許して↑え

そしてリーリアはアホです。

それはもう、可愛いぐらいwww

楽しんでいただければ幸いです（\*^^）v

あの謎の女性の名前が未発覚なのは仕様ですのでご安心を。

次回は船内でのやり取りが中心で、ある人物たちの加入を予定します。

それではまた次回、お会いできることを祈りつつ。by暇人

3・サンマはリーリアが美味しくいただ（ry）（前書き）

リーリア 可愛いよ リーリア

### 3・サンマはリーリアが美味しくいただ（ry

「……と言う夢を見たんだ」

「夢オチみたいな感じで説明しないでよ……信憑性がなくなっちゃうから」

「ま、らしいっちゃあらしいけどさ」

バンエルティア号に帰還したリーリア達は現在いるギルドメンバーを全員集め起きた事、知った事を説明した。

もちろん修行の名目で外出したので例の彼女との出会いは偶然、という事でごまかしたのだが。

「信じられませんか」

チャットはリーリア達の話聞いた後きっぱりと言った。

「まずその謎の声、リーリアさんの気のせいかもしれませんが？  
それにエミルさんも一緒に見たと言っていましたでしたが証拠がありません。」

イリアさんもいたようですが、話が漠然としすぎていて簡単に思いつきそうな冗談に聞こえます」

「おいおい、チャット。そりゃいくらなんでも言い過ぎなんじゃないか？」

チャットの言葉を聞いて落ち込むリーリア達を見かねてカリッドがたしなめるが彼女は態度を改めない。

「そうは言いますが、リッドさんだって信じられないでしょう?」

「そ、そりゃ証拠もなにねーけどさ……だからって言い過ぎって  
もんだ」

「そうよ!! あんたちよつとエミルに対して態度が悪いんじゃないの?」

逆に問われたリッドだったが頬を掻き言い過ぎている事に関しては  
注意を続け、マルタはエミルを信用していないという一点のみ反応  
する。

「あの、喧嘩はダメだと思っんですけど……あ、僕はもちろん信じ  
るよ?」

言い争いが悪化しそうなを見てアタフタし始めたルカはリーリア  
達に小さく笑顔を向ける。

「そんなに信じられないならさ、みんなで行けばいいじゃない?  
それでハッキリするよ」

まとめて一番簡単な解決方法を提示したのは、ファラだった。

一瞬唖然とした一同だったが、言われてみれば確かにそれが一番手  
っ取り早い。

結局この日はもう日が暮れてしまった為、翌日バンエルティア号こ  
と全員で森の上空まで移動することになった。

.....

装備を整え、両手にピタリと装着されたグローブを動かし感触を確かめる。

昨日のような装備ミスはしない。

慌てることも無く、今回は安心して背中を預けられる仲間が一緒なのだ。

恐れることなど何もない。

「一気に駆け抜けて向かうから、ボクについてきて」

リーリアの言葉に船を降り、アイルーナ大森林に立ったアドリビットムメンバー一同は頷く。

「じゃ、行くよ」

前回よりも体が軽い。

手に持つ剣「サーベル」を構え目の前にいたウッドルードに狙いを

定める。

一瞬横を見て右を走るマルタ、左を走るイリアにアイコンタクト。

それだけで十分だった。

「セツシブバレット!!」

跳躍したイリアはウッドルーダの翼を高速連射で撃ち抜き地面に落とす。

「フォトン!!」

落ちてなお、動こうとする奴を黄色の球体が包み込み動きを封じる。そこに狙い通りイリアが突っ込んだ。

「ハアアアアアア、瞬迅剣!!」

深々と刺さったまま、トドメと言わんばかりにマルタの放ったフォトンが弾けウッドルーダは消滅した。

それでも一同は気を抜かずさらに前へ前へと走り続ける。後方から追ってくるウルフやチュンチュンはルカやリッドが薙ぎ払い、動きの遅い敵はアラが牽制しチャットがバックで殴る。

トレントのような大型は全てエミルが大笑いしながら屠っていた。

「よし、もう一息だとおも——」

言おうとした矢先、その先の言葉は1人の女性の悲鳴で掻き消された。

周辺の敵を掃討し終え一度集まったメンバーたちだったが、放って

はおけない。

「今の悲鳴、聞いたよね？」

「おう。どうするんだ、リーダー？」

ファラの確認に頷くリッドはチャットに方針を変更するかどうか尋ねる。

尋ねられたチャットはリーリアの言葉の確認か悲鳴の確認か、どちらを優先するか一瞬迷ってしまった。

「チャットがどう言おうとボクは今の悲鳴の確認に行くよ。助けを待ってるかもしれないんだから」

指示を待っていたメンバーの中、最初に動いたのはやはりリーリアだった。

チャットが何かを言う前に走り出した彼女に次々とメンバーたちも続く。

「お前、間違えちゃいけない場面でこの様なら……キャプテンもギルドマスターもやめちまえ」

「な……っ!!」

最後に残ったのはエミルとチャット。

そしてエミルは追いかける為走り出すが、その際動けずにいた彼女にそう言っ去った。

1人残っていても仕方ないから追いかけるチャットだが、彼の一言は想像以上にチャットを押しつぶしていた。

.....

「君、よくもまあそんなに直感で動けるね」

「ま、うだうだしてるよりは全然いいんだけどさ」

感心したような様子のマルタにイリアが続く。  
悲鳴のしたであろう場所に向かっていく間、不気味なほど魔物に遭遇しなかった。

そして、しばらくして現場に到着した彼女らが見たのは、傷つき倒れ意識を失っていた男女数名だった。

.....

「バンエルティア号・医務室」

結局あれから負傷していた彼らを放置しておくのもどうかと思ったのでリーリアの証言の真偽を確かめるのを後回しにし船へ連れて戻った。

医者や医療に精通した人材がまだいないメンバーの中でも治癒術を使えるマルタとイリアの活躍によって次の日の朝、目を覚ました人に話を伺うことにした。

もちろんルカもいたのだが、彼女らの豪快さにアツサリと敗北。下っ端扱いされていた事を他のメンバーは誰1人として知らない。

「……は……？」

「目が覚めたんですね。ここはギルド『アドリビトム』の拠点、バンエルティア号の医務室です」

「アドリビトム？ このギルドはどここの国の所属なんだ？」

目覚めた彼はぼんやりとした様子だが質問を投げかけてきた。

「このアドリビトムはどの国にも所属していませんよ」

答えたのはマルタではなく今医務室に入ってきたチャット。その後ろにはリーリアやリッド、そして一度外に出ていたルカがいた。

「無所属……いやまて、ナタリアはどこだ？」

「ナタリア？」

青年は部屋を見渡し自分の探している人物がいないと知ると我に返って近くにいたルカの肩を掴む。  
あえて、女性を避けて。

「ナタリア……ナタリア・ルツ・キムラスカ・ランバルディア王女の事だ……！」

“王女”と言う単語にその場にいた一同は凍りついた。

「王女って、貴方達はいったいなんです？」

チャットの問いにこれまた思い出したかのように落ち着きを取り戻す青年。

「っと、しまった。自己紹介がまだだったな。俺はガイ。ガイ・セシルだ。」

パーテム王国の王立自警団所属、女王直属の護衛人なんだが……  
そうか、守れなかったのか」

ガイと名乗った金の短髪の彼は自らの両手を眺め落胆する。

「ガイ、少々騒がしいですよ。ただでさえ寝不足な私の安眠を妨害するつもりですか？」

「気絶と安眠は別だろ、カーティス大佐」

「つれませんねえ、冗談も通じないほど動揺しているとは……情けない」

「このメガネのおっちゃんは誰？」

「！？」

沈黙を破るように響いたカーティス大佐と呼ばれた男を、あろうことかりーリンは「おっちゃん」呼ばわりした。

そのぶっ飛んだ行動にガイとカーティス大佐を含めた全員が驚く。

「し、心外ですね……お兄さんと呼びたまえ」

「訂正部分そこかよ……おい君、その人はジェイド・カーティス大佐だ。なるべく言葉や態度には気を付けてくれ」

ガイが頬を引きつらせながらもメガネに茶の長い髪を持った男性を指さす。

「コラコラ、指を刺さない。で、王女は？」

「すみません、どうやら守りきれなかったようです」

ジェイドの鋭い眼差しに思わずかたくなって答えるガイ。  
そんな様子を見て初めてチャットらは「ああ、ほんとに軍人なんだ……」と思っていた。

「まあいいでしょう。奪われたのなら奪い返せばいいだけの話です。幸いにもここは無所属のギルド……どうです、キャプテン。私達を雇ってくださいませんか？」

「は、はあ!？」

「一応私達も軍人ですから腕は保証しますよ？　まだ起きない2人も十分な戦力でしょう」

ジェイドが指さしたのは人形を抱いた幼い少女と起伏に富んだ体に茶のロングストレートの美女。

彼の話では少女が後衛の攻撃魔法の使える人形師、女性は回復・補助魔法を得意とするらしい。

「私は参加させてもいいと思うなあ。ギルドは大勢の方が楽しいし」

「俺もファラに賛成だ。人数が増えれば1人の仕事量も減るだろ」

「軍人さんなら安心して仕事を任せられますしね」

ファラとリッド、マルタは大いに賛成しているようで、チャットを見る。

だが、彼女は戸惑っていた。

昨日森の中でエミルに言われた事が引っかかっていたのだ。

“間違えちゃいけない場面でこの様なら……キャプテンもギルドマスターもやめちまえ”

あの時チャットは真偽の追求と人命救助を天秤にかけてしまった。そんなことは、比べるまでも無い事だとわかっていたはずなのに。

「で、どうです。返答をお願いします」

「……………」

彼女は再び彼にあんなことを言われなくなかった。だから答える。

「わかりました。ここ、アドリビトムのメンバーへの加入を許可します」

するとジェイドはニッコリと笑い満足そうに頷いた。

「ありがとうございます。それでは、今後よろしくお願いしますね」

アドリビトムはパーテム王国の軍人らを加入したと同時に、

連れ去られたと思われるナタリア王女の搜索と奪還を目標に加えるのだった。

決定を下した本人、チャットは新たなメンバーを迎えたというのに顔色が良くない。

彼女は挨拶を交わしていた一同を眺めながらも、自らの在り方に悩んでいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ナタリア王女……かぁ」

その日の夜、ガイとジェイドから詳しく状況を説明されていたチャットやマルタなどからリーリアは離れていた。

正直この世界の状況を知らないの、話を聞いていてもさっぱりわからないからだ。

見た事のない要人の名前を呟き、空を見上げる。

「ねえ世界樹……君はボクに何をさせたかったのさ？」

遠く、うつすらと輪郭だけが見えるこの世界の象徴である2本の世界樹。

リーリアは不思議と片方の世界樹ばかり見ていた。

知つての通りこの世界には2本の世界樹が存在する。

一方はエルナ王国の首都に。

もう一方はグレルシル帝国の首都に。

彼女が見ていたのはエルナ王国の世界樹。

薄くしか発光しない、今は衰退時期の大樹。

「どうしてこの世界には世界樹が2本もあるんだろう……」

今まで誰も口にしなかった問い。

この世界で生まれ、生命を育む生き物にとってはこの世界しか知らないのだからそんな問いは生まれない。

だがそれはリーリアも同じはず。

しかし彼女はこの世界の事どころか自分の事でさえも記憶を持ってはいない。

『知識が無い』と言う事は、『無限の発想』と言い換えられる。

「楽しいなあ、この世界。ボクの知らない事ばかりだ」

夜風に長い髪を流しつつ、思いの他上機嫌なリーリアは明日が来るのを待っていた。

### 3・サンマはリーリアが美味しくいただ（ry（後書き）

今回は戦闘シーンを工夫して1人でのコンボでは無く複数人での連携を試みました。

カッコ良く書けてれば良いんですけど……

ま、ラタ様は1人で無双してましたけどねwww

そして今回加入してきたのはアビスの4名。

ガイ「ガイ様、華麗に参上!!!」

ジェイド「いい歳して恥ずかしくないんですかね」

ロリ（仮）「大佐、名乗っちゃダメですか!?!」

ボイン（仮）「今すぐ名乗らせて下さい、大佐」

ジェイド「実には的確な仮名じゃないですか。本編もそれでいきますか?」

2人「嫌です」

ガイ「っとまあ怖いぐらい温度差のあるメンツだがよろしくな」

ジェイド「ではささっと締めくくっちゃってくださいね」

ボイン（仮）「では、最後は私達2人で」

ロリ（仮）「はい。じゃ、せーの」

2人「未来へ導け、ココロの光！！ 夢見る翼！！」

ロリ（仮）（お金持ちじゃないじゃん、ここのギルド……）

ボイン（仮）（カワイイの……どこにも、無いんだ）

#### 4・響く願い（前書き）

今日もリーリアは元気です

#### 4・響く願い

「今日の依頼は、以前中断してしまったリーリアさんの発言の真偽を再度確かめに行ってもらいます」

「やっぱり信じないんだね」

「さすがにリーリアに失礼だと思うけど」

チャットから依頼の内容を説明してもらうつとあーあ、と呆れるエミルとマルタ。

リーリアはそんな彼らに気にしてない、とフォローするが表情は暗かった。

「今回はリーリアさん、エミルさんと……」

同行者について説明をしたところでチャットは横に視線を移す。そこには頭に人形を乗せて立っている小柄な少女が腰に手を当てて立っていた。

「はじめましてだね、私はアニス・タトリン。大佐の部下だけど特にこだわりは無いからアニスでいいよ」

「先ほど目を覚ましたアニスさんの3人で向かってもらいます」

「えー、また私はエミルと一緒にじゃないの？」

メンバーを言われ、エミルと共に行動できない事で文句を言いつつもおとなしく下がるマルタ。

その間にもリーリアは装備を整えていた。

.....

「ねえ、この前みたいにまた会えると思う？」

森の中を歩いていた3人の内、エミルがふとリーリアに尋ねたが彼女は困った顔をしていた。

「たぶん会えないと思う。ボクはもうあの声も聞こえないし、なによりそういう感覚がないんだ」

「記憶が無い、不思議な声が聞こえる……ねえ。チャットが信じないのも無理ないかもね」

「アニス、どういう事さ？」

「うんうん、ボクもよくわかんない」

リーリアの言葉にため息を漏らすアニス。  
彼女の言葉にエミルとリーリアは首をかしげていた。

「だって普通に考えればありえないでしょ、それ。いくら数人が見たとか言ってもね」

「確かに……そうだけど」

「ボクは嘘つかないもん。信じないなら信じなくていい……ボクはボクで動くから」

酷く悲しい顔で腰に収めている剣を撫でるリーリア。

いつもとは違う彼女のその姿に何も言えないエミルとバツの悪そう  
な顔して進むアニス。

その時だった

――助けて――！！

昨日は聞けなかったあの声が頭に突き刺さるように響く。

「痛——！！」

「リーリア?」

「え、ちよつと大丈夫？」

以前とはまるで違う痛みに思わず膝を付いてしまった彼女に二人は驚いた。

見ればリーリアの痛がり方は尋常ではない。

瞳孔は収縮し汗が噴き出している。体はあちこち小刻みに震え、血管が浮き出していた。

「あ……………うあ……………!？」

—誰か……………お願い—

なんだこの痛みは、と混乱するリーリアの横で彼は何が起きたのか理解したようだ。

一瞬体をビクリと震わせたエミルが次に目を開けば赤い瞳が現れる。

「リーリア、あの声が聞こえるんだろ!？」

「あの声？」

「だからさっきからこいつは言い続けてただろ!! 精霊の声だ!」

察しの悪いアニスに焦っていた事もあつてかエミルは怒鳴る。  
彼の突然の豹変に驚くアニスを余所に彼はリーリアを抱き上げる。

「お前は俺が抱いて走る。お前は方向だけ指示してくれればいい、いいな!?!」

「う、うん……」

「アニス、テメエも遅れんなよ!?!」

「は、はい!?!」

そして彼は走り出し加速していった。

.....

「ハッ、ハッ、ハッ——!?!」

「早く!! 捕まったら何されるかわかんないんだよ!?!」

「う、うん」

ただ前へ走る

振り向かず走る

逃げるかのように、走る。

「待て！！　貴様ら自分らが何をしたのかわかっているのか！？」

私達を追ってくる兵士達が叫ぶのを見て

「待てって言われて待つバカがどこにいるってのよ！！」

叫び返す私の親友だけど、次に兵士たちは言うてはいけない事を言ってしまった。

「貴様……奴隷の分際で生意気な！！」

これはいけない。

納得できない。

冗談じゃない。

止まらなきゃ。

そして思い知らせよう。

「兵士さん……」

「武器を捨てろ」

「これだから男ってサイテーなクズ野郎なのさ」

「両手を後頭部に抑えて膝を付け!!」

私達の受けた苦しみを。

私達の知る世界の本当の在り方を。

「前衛は任せて!!」

「よっしゃ、いつも通りやるよ!!」

「抵抗するのなら死んでも文句を言っなよ」

「グレルシール帝国に逆らうとどうなるか教えてやる」

目の前にいる数名の騎士に「トゥーハンドソード」を構える。  
その後ろではすでに呪文詠唱が始まっていた。

「悪く思わないでね!!」

駆け出して真っ直ぐに一番近い男性の懐へ入る。

剣を振り上げた隙に空いた腹部に大剣の柄を突き立て1人目を弾き飛ばした私は詠唱を中断させようとした別の男性に走る。

「旋桜花!!」

一応安全のために刃で斬らないよう刀身でその男を横殴りにして2人目を撃破。

残った3人は、私が手を下すまでもない。

「きひひ……世の中信じれるのは女同士ってね!!」

紫色の魔方陣が輝く。

「無限の闇 鮮血をまき散らせ ブラッディハウリング!!」

吹き上がる呪いの嵐

残りの3名の兵士は飲み込まれ派手に吹き飛び動かなくなった。それを見て術者である彼女は頬を釣り上げニタニタと笑い続ける。

「ザマー見ろ!! 私達に手を出すとどうなるか他の連中にも教えてやるんだねえ!!」

「シヨコラ、口調口調」

「あらいけない。淑女たるもの礼儀は完璧でなくちゃね」

ウィンクしてみせた彼女の顔を見てホッとした私はそのまま彼女と移動しようとしたのだが……

「武器を捨てて投降してくれ。悪いようにはしない……女性を傷つけるつもりも無いんだ」

金短髪に白を基調とした鎧を身に纏った男性が私達の背後に立っていた。

「男なんて口だけでしょ。なによ、この子の事やらしい目で見てんじゃないよ!!」

「ごめんなさい……私達はただ旅をしたいだけなんです」

シヨコラの暴言に続けて私は彼に頭を下げる。

すると彼は困ったような顔をして頭を掻いていたが、一回ため息をついて再び顔を上げるとそこには先ほどの優しさが消えていた。

「君みたいな人は嫌いじゃない。けど、勝手な奴隷解放は認めてないんだ。法を守る為だ、許せとは言わない」

腰に収められていた美しい剣を抜き私達に向けて構える。  
先ほどのまでの騎士たちとは比べ物にならないほど研ぎ澄まされたその覇気と威圧感。

「僕はグレルシール帝国騎士団長フレン。最後の警告だ、そのナツナツ族を今すぐ引き渡してくれば君には何もしない」

あり得ない。

たとえ人じゃなく希少価値のあるナツナツ族であっても、親友を……シヨコラを……渡せるはずがない。

「お断りします。貴方達が一方的に捕えて使役しているだけじゃな

い。彼女達にだって自由はある!!」

戦おう

これは私達だけの戦いじゃない

これはそう、自由を掴むための戦いの第一歩なんだ。

「そうか……だが言っておくよ。君達は何も知らないんだ。社会の在り方を、何も」

「そうかいそうかい、勝手に言ってなハンサムボーイ。石頭は嫌われるんだよ」

「貴方にも優しさがあるのなら、見逃して……お願い!!」

だから戦いは避けられない。

悲しそうに瞳を揺らすフレンは迷いなくこちらに踏み込んでくる。

「虎牙破斬!!」

隙のない整えられた綺麗な動きは今まで私が戦ってきた中でも最強

と言ってもいいレベル。

ただ一度の瞬きの間に彼は私の苦手な距離に入ってくる。

ギリギリのところまで刀身での防御に成功したのだけれど、それでも両手が痺れた。

決して睨まれているわけじゃないのに、視線が合うだけで背筋が凍りつくみたい。

「これが……」

「力の差は歴然だ、頼むから武器を捨ててくれ」

防御するので精一杯。

大剣を扱う私にとって動きの速い彼は天敵で、一歩間違えば死んでしまいかもしれない。

けど

「これが、この帝国の騎士団長の力か……！！」

私は本当の騎士と対峙したことにかすかな喜びを感じていた。

でも現実として私はシヨコラを守らなきゃいけない。けど、このままじゃ守れない。

「深闇より彼の者を貫け この一撃 デモンズランス！！」

「魔法を使えるなんてもつと危険だ……集いし光 彼の者を貫け  
この一撃 ホーリーランス！！」

援護としてシヨコラが放ったデモンズランス。

それを彼は詠唱を一瞬で済まして剣を振り下ろし放ったホーリーランスで相殺する。

「うつそーん！？ 詠唱早過ぎでしょアンタ！！」

「隙あり、獅子戦吼！！」

「きゃ！？」

一瞬の出来事に驚きを隠せなかった私はその隙を突かれて吹き飛んでしまった。

肺がつぶれたかのような、直接脳を揺らされたような、そんな強烈な感覚。

地面と木に打ち付けられたこの痛みは紛れもなく本物で

「離せっ！！ アタシがそんなに珍しいかい、ナツナツツがそんなに珍しいかい、ええ！？」

「わかってほしい……僕たちの話を聞いてくれ」

「ちくしょう、みんなしてアタシらを……アタシらを！！」

守りきれず捕まってもがく親友を見ることしかできないこの状況も本物で

「く……あ……！！」

言葉どころか、呼吸も満足にできない私もまた、本物だった。

助けて

私達の問題だとしても

誰か……お願い

そう祈る事しかできなかった。

何もなかった私に、シヨコラは世界を教えてくれた。

不安だった私を、シヨコラは優しく迎えてくれた。

涙を止められなかった私と、ショコラは一緒に泣いてくれた。

だから自分で助けたい。

でもそれが出来ない事が悔しくて涙が止まらない。  
肺はまだ潰れたような感じがするけれど、息ができないわけじゃない。

死なない限り、私は負けてなんかないんだ。

「そこまでだ」

#### 4・響く願い（後書き）

マルタ「第4話いえーい♪」

アニス「ロリ（仮）改めアニス・タトリンです、いえーい!!」

ファラ「なんだかよくわかんないけどいえーい♪」

リッド「知らないなら参加するなよお」

3人「「リッドノリ悪い!!」「」」

リッド「し、新キャラ出現いえーい!!（棒読み）」

マルタ「なんかリッドのくせに重要な事棒読みで言ってるんだけど？」

アニス「ねー」

ファラ「誰が言ったか、なんて置いといて。新キャラが3人!!」

フレン「どーも、TOVからフレン・シーフォです」

アニス「騎士団長なんですよね。……ということは!？」

フレン「僕は平民出身ですので……えーと」

アニス「さー、帰った帰った。次」

シヨコラ「やほー。アタシはナツナツ族のシヨコラ。性別はもちろんなだよ」  
フレン「え、僕これだけ？」

少女A「まだ名前は言えないけどはじめまして！！」

マルタ「シヨコラ可愛い！！」

ファラ「早く本編で合流できると嬉しいな！！　じゃ、今回はこれまで！！」

アニス「じゃあいくよ、せーの！！」

女性陣「「未来へ導け、ココロの光！！　夢見る翼！！」」

フレン「次回も……お楽しみに……ぐすん」

リッド「いつか良い事あるって……頑張ろうぜ、お互いに」

・5 出会い、そしておバカ（前書き）

ようやく彼女を出せました。

最近更新が遅くてすみません or z

## ・5 出会い、そしておバカ

走り始めてすぐ、3人は現場に到着した。

「あれ……ゲレルシールの騎士団長だよ」

「アニス、知ってるのか」

「あのね……私一応軍人なんですけどー」

純白の鎧を身に纏っている男性を目にし緊張感の広がるアニスの横、なんでもなさそうにエミルが息を吐く。

すると彼に抱かれていたリーリアは降ろして欲しいのか彼の背中をちよんちよんと叩く。

「ボク、もう大丈夫だから……降ろして」

「んあ？ 体調が不安定な奴を降ろせるかよ」

エミルがバツサリと断り彼女を見た時ギョツとした。

「あのね……ボクも一応女の子だから……こういうの恥ずかしいんだ／＼／＼／＼」

頬が赤く染まり、なにやらモジモジしながらも上目使いでこちらを見るリーリアがいたのだ。

そのしぐさに思わずエミルは腕の力を抜いてしまい、それと同時にリーリアが地面に落ちた。

「痛っ!!」……ふう。でもマルタの気持ちがあった気がするノ  
ノノノノ」

「お……悪い、つい……」

「「……………ノノノノノ」」

「あのー、お二人さん。なんかアヤシイ雰囲気の中悪いんですけどー、彼女達ヤバイよ?」

「「そうだった!」」

(忘れてたの!?)

しばし見つめ合っていた2人だったが、アニスの言葉で我に返る。  
そして様子を見ると、白い騎士は少女を吹き飛ばし、相方であろう  
小動物を掴んで少女に剣を突き付けている。

「あれって、ナツナツツ族? だとするとどうしてグレルシールが  
…………?」

「ナツナツツってあのちっちゃい子の事?」

「んな説明はどうでもいい。もう出るぞ」

「同感。リーリア、無理はしないでね」

「うん。アニスは援護お願い」

「りょーかい」

そして勢いよく草むらからエミルとリーリアが飛び出し剣を構える。

「そこまでだ」

エミルが低く唸ると騎士は振り向いた。

「……………ガイ？」

「別人だ。僕はフレン。グレルシール帝国騎士団長を務めている。  
何か用かな？」

「みりゃわかんたろ？」

「わからないね。僕は任務をこなしているだけだから」

「人を守る為の騎士が、人を泣かせていいのか？」

エミルの言葉にフレンが一瞬息をのむように見えたが、それもほんの一瞬。

彼は複雑な表情のまま剣をリーリア達に向けた。

「法を守り、秩序を保つ事で結果としてより多くの人々が泣かずに済む。何もおかしくは無い」

「なら戦争していること自体それに矛盾してるってボクは思っなあ」

「!？」

（（確かに））

単純な答えだが、だからこそフレンのような人物には効果的な言葉だった。

「戦争をすれば徴兵で労働者が減る。商売や物流も悪化。国民に貧困が蔓延して死んでいく」

「君は……」

「私？ 私はパーテム王国王女直轄自警団所属、アニス・タトリン曹長です」

「パーテムの軍人がなぜここにいる」

「その前に……」

アニスがチラリと横を見る。

するとフレンの頭上から跳躍したエミルが剣を振り下ろした。

「——ッラアアア!!」

「クッ!?!」

「あぶねーっつの!!」

思わず防御に集中した隙にシヨコラはフレンの拘束を抜けた。

.....

そんな攻防の横、いつの間にか移動し少女に近づいていたリーリアは彼女の肩を揺らす。

「ねえ、大丈夫?」

「ん……………貴方達は、だれ?」

顔を上げた少女と目が合うリーリア。

その瞬間、彼女は何とも言えない不思議な感情と感覚に支配された。

「ボ……………ボクは、リーリア。アドリビツムっていうギルドで働いてるんだ」

「リーリア……………懐かしい感じがする。私はカノンノ。カノンノ・ソリユーラって言うんだ」

ドクン、と心臓が跳ね上がる錯覚を覚えたリーリア。

知らないはずのその名前を耳にしたとき、より大きな衝撃が体の中を巡っていた。

「カ、カノンノ……………とりあえず逃げよう。君のお友達も一緒に」

「うん……………ありがとう」

彼女を起こす為手を差し伸べるリーリア。

カノンノはその小さな手を握り、再び立ち上がる。

「おい、そっちは平気か!？」

直後フレンの相手をしていたエミルの怒鳴り声が響き、リーリアは平気だ、と返す。

シヨコラも無事カノンノと合流して一足先にリーリア達は森の中を駆け抜けた。

.....

「君達、自分らが何をしているのか理解しているのかい？」

「当然だ」

「襲われてた少女の救援だけど、なにか？」

エミルとアニスに冷たく返されたフレンは不愉快そうに奥歯をギリギリと鳴らす。

一方でエミルとアニスは離脱のタイミングを計っていた。

「あの子は無断での奴隷解放に加担した。定められた法に従えないのであれば罰せなければだめなんだ」

「勝手な言い分だね。グレルシールは堅物ばかりだから戦争回避も出来なかったんだよ」

「要するにテメーらはバカだって話だな」

ギュツと剣の柄を握り直す音が聞こえる。

「僕をああだこうだと言うのは構わない。けど、グレルシールの皆

を罵倒する事だけは許さないぞ」

「いや、だからその思い込みがちな態度がダメなんだってば……」

「知るか。アニス、お前ももう戻れ」

「ほえ？ エミルはどうすんの？」

「俺は問題ない。いいから……行け」

半ば無理やりにアニスを撤退させた彼はフレンを見る。

「まるで1人で十分だ、とでも言いたげだね……君」

「ハッ、言いたげじゃねえ。1人で十分なんだ……来いよ、騎士団長さんよお」

「もう手加減はしないからね？」

「ぐっ!!」

そしてフレンの初撃がエミルを襲う。

上段からの振り下ろしを受け止めると予想外な事に手が痺れた。先ほどまでとはまるで違うその威力に驚いていた隙に彼は右わき腹に強烈な痛みを感じる。

そして痛い、と思った時には目の前に彼の剣の刃が迫っていた。

「虎牙破斬！！」

「うゲホツゲホツ……ナメてんじゃ、ねーぞぉー！！」

エミルはそれを紙一重で回避し、逆にフレンの着地時の軸足である右足を蹴って払った。

その足払いにはさすがのフレンも耐え切れず転倒。

「じゃあな……今回は俺達の勝ちだ」

鎧をまとっていない分身軽なエミルはその隙を見て脱兎の如く撤退する。

追いつかれても困るのでその過程で通り過ぎる木々を切り裂き倒していくのを忘れなかった。

「僕としたことが……不覚だ。これではユーリやリタに笑われてしまふよ」

起き上がって3人が撤退を済ませてしまったことに気付くとフレンは気が抜けたかのように空を見る。

「そっいえば朝食半分しか食べれてなかったなあ」

森を吹き抜ける穏やかな風が彼の髪を流し、火照った体を冷ましてくれる。

「お腹が空いたよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

inバンエルティア号

「では、貴女はグレルシール帝国に捕まってしまったその友人を助けるために抵抗していたのですね？」

「はい」

「これから行くあてはありますか？」

「いえ、特にありません。私は数年前以前の記憶が無いので……ここ5年間はずっと旅をしていました」

「貴方達さえよければ、ここアドリビトムで働いてみませんか？  
(もちろん僕の子分としてですが)」

「ホントですか！？ ぜひお願いします!!」

勧誘はあつという間だった。

リーリア達が連れ帰った後、チャットが話を聞き、行くあてのない彼女らを勧誘したのだ。

すると嬉しそうに笑い、快く承諾してくれたという話らしい。

ホールに集まった一同を前に少し緊張気味なカノンノ。

それとはある意味対照に彼女の後ろに隠れておどおどしているシヨコラ。

「今日からお世話になります、カノンノ・ソリユーラです。武器は大剣、魔法も攻防共に使えます。

お仕事とかで誘ってもらえるとすごく嬉しいな、よろしく願いしまーす!!」

「カノンノの親友の……シヨコラよ。ナツナツだけど偏見だけはやめておくれ。

船長さんと話し合った結果、今後はこの船内の家事全般を担当することになったんでよろしく。

一応戦闘にも参加できるけど、攻撃魔法での後方支援だけだから……うん。基本的にキッチンにいるから」

するとホールは拍手で満たされる。

次々と2人に話しかける女性陣や、自分たちの場所に戻る男性陣。

リーリアは1人甲板にでて寝ころび、いつものように空を見上げる。

「カノンノ……か。記憶が無いって、似てるような気がするな……」

そう呟いてウトウトしていたのだが。

「リーリア、ちょっといいかしら」

「にやわっ！？ はわわ、ごめんなさい、寝てないです、仕事もしてますからおやつ抜きだけはっ！！」

「どれだけ眠かったのかしら。とりあえず怒るでも仕事でもないから」

「ふえ？」

体を起こし立ち上がる。

声をかけてきた人物を見ると、彼女にとってはほぼ初対面の人物だった。

「まず自己紹介からかしら。私はティア・グランツ。先日は助けてくれてありがとう」

「……………ほあ〜」

「で、要件なのだけれど……………って、リーリア。貴女さつきから何をジロジロと——」

「いいなあ……おっきいおっぱい」

モミモミモミモミモミモミモミ……

「ひゃ——!？」

リーリアはティアの自己紹介など名前しか聞いていなかった。  
とにかく目の前に揺れる夢の果实を手にしたかったのだ。

取りつかれたかのように掴んで揉むリーリア。

「いいなあ……背も高いし……おっきいし、やわらかい……ぐ  
すん」

「んっ／＼／＼／＼ちよつと、コラ……ペースが速い……じゃなく  
て!!……ひゃん!？」

あろうことが制止させようとした彼女を掻い潜って直に揉んでやろうと試み始めた。

が、さすがにティアは許さない。

「コラコラ……いい加減、人の話を聞きなさい」

突如リーリアはティアから引きはがされ黄色い光が彼女を覆う。

「反省しないならこのままフォトンを使ってしまっけれど……どうする？」

「…………ハッ！？　ボ、ボクは一体何を？　ボクには無い魅力だったから思わず…………ごめんごめん」

どうやら反省どころか先ほどまで無我夢中だったらしい。ティアはリーリアが男でなくて心底神に感謝していた。

「次やったらグランドクロスだからね？　で、チャットが貴女を呼んでたわ。行ってあげなさい」

「もうしないって…………（たぶん）！！　わかった。チャットはどこにいるかな？」

「機関室だと思うわ」

「はい」

トテトテと駆けていくリーリアを見送ったティアは1人甲板で隠すように胸を覆う。

「別に、大きくなっても良い事なんてないのに……恥ずかしいだけよ」

.....

「チャット、何か用？」

「いいところに来てくれましたね、リーリアさん」

ティアの言う通り彼女は機関室にいた。

困ったように機関部を覗き込んでため息を漏らす。

「部品が壊れてるの？」

「あゝ、おしいですね。そろそろここも点検した方が良いと思うんですよ」

「点検？」

話を聞くとこの船は半永久機関なのだが、定期的に整備や点検を受けているらしい。

今回もそんな時期だから先方にアポイントメントを取ってきてほし

いと頼まれたのだ。

「同行者はマルタさんと僕です。すぐに済むと思いますので安心してください」

「ふーん。で、行き先はどこなの？」

「ふふふ、それはですね……毎度お世話になっているあそこですよ」

チャットは自慢げに胸を張り次の行先を告げる。

「エルナ王国自慢の、世界にその名を知らぬ者無しとまで言わせるレザレノカンパニーです!!」

・5 出会い、そしておバカ（後書き）

ティア「ボイン（仮）改め、ティア・グランツです」

カノンノ「少女A改め、カノンノ・ソリユーラです」

フレン「引き続き悪役っぽいフレンです」

カノンノ「いや、今回でようやくみなさんと合流です。リーリアとも仲良くなりたいなあ（\*^^）」

ティア「まさか揉まれるとは思わなかったわ」

フレン「ティアは美人ですから、男女関係なく人気なんだと思いますよ？」

ティア「カ、カノンノ……私騎士にセクハラされたわ」  
フレン「るえ？」

カノンノ「H E N T A Iには制裁を加えなきゃね!!」

フレン「待つて、僕は何も問題ないと思うんだけど——」

ジェイド「はい、通報にお答えして参上しましたよ」

フレン「うげっ、貴方はキャラ殺しのジェイド!？」

ジェイド「失敬な。私はただ皆さんの触れてほしくない部分をぶっちゃけているだけですよー？」

フレン「それがダメなんだって——」

以下省略

カノンノ「はい、というわけで第5話でした。

ジ

エイド「貴方は確か——」

ティア「次回はお分かりの通り彼らの登場です」

フ

レン「だあーっ!? 止めてくれえー!!」

カノンノ「TOSプレイヤーならニヤニヤしてほしいですね」

ジェイド「自主規制」

ティア「じゃ、締めましょう。いくわよ」

フ

レン「いやあああああ!?!」

カノンノ「はい」

ジェイド「未来へ導けえココロの光、夢見る翼あ——」

カノンノ&ティア「あ~~~~っ!?!」

フレン「ぐすん、僕はガン。ムになるんだ……E.L.Sにだって負けないんだぞお……」

## 6・鉄人シェフ、現る！？（前書き）

前回の更新から一ヶ月ほど空いてしまいました……

最近「織り成す」を執筆し続けていてこっちまで手が回らなかったんです。

ジェイド「要するにめんどくさかったんですねー、わかりますよー」

ち、違うから！？

ジェイド「ではみなさん、お待ちかねの本編をどうぞ」

無視かいつ……！！

## 6・鉄人シェフ、現る！?

「お茶です」

「ああ、すまないね。今日は午後に客人が来るらしい」

「聞いてます……いつもの船の整備ですよね」

艶の良い綺麗な机に向かい書類仕事をしている青髪大柄な男性は置かれたお茶をすすする。

机の上には“会長”と刻まれた金のプレートが置いてある。

お茶を置き彼の言葉に頷くのは小柄でピンク色の髪を揺らす少女。

小洒落た少しフリルのついた洋服でトテトテと部屋の中を移動する姿はなんとも可愛らしい。

しかし、胸には金で“会長秘書”と刻まれたプレートが付いていた。

「私は技術者と共にあちらの船に出向こうと思う」

「では私ともう1人護衛を用意しておきますね」

「すまないな。君は姉に似て気配りが上手だ」

「……それ、セクハラだって言いつけますよ?」

「勘弁してくれないか、プレセア」

「ふふ、冗談ですよーガルさん」

プレセアと呼ばれた少女はこのレザレノ・カンパニーの会長リーガ

ル・ブライアンに小さく微笑んで部屋の奥へと消えた。  
再び部屋に1人となったリーガルは息を漏らしながらも手元にある書類を見る。

それは見慣れたバンエルティア号の解明されている限りの資料書類だった。

「久々にあの船を見れるのか。ファラとのオムレッツ勝負の準備でもしておくでしょう」

眩きながらも引き出しを開けとある鍵を取り出す。

そして立ち上がり食器棚に鍵を差し込み開くと、そこにはびっしりとさまざまな包丁が飾ってあった。

「MY包丁」と言うのが彼の趣味の内の一つ、と言うのは有名な話である。

.....

「うわー、この建物広ーい!!」

「コラコラはしゃいじゃ駄目よリーリア」

「とかいうマルタさんはガチガチじゃないですか」

「チャット……私はリーガルさんにお世話になったから緊張するのよ……」

遠足に来た子供のようにはしゃぎあっちこっちせわしく動くリーリアをたしなめるマルタ。

そんな彼女の様子に苦笑いしつつもレザレノ・カンパニー1階総合カウンターで挨拶をするチャット。

そして3人が移動しようとした時だった。

「お久しぶりです、チャットさん、マルタさん」

「「プレセア（さん）！！」」

「だーれ、この子？……あべしっ！！」

「私は子供じゃありません。ジーニアスみたいなことを言わないでください」

「くうおお~~~~！！　　じーにあすつて誰え……？」

プレセアを見て首をかしげたリーリアは彼女からチョップを受け悶絶。

首根っこを掴まれてプレセアに連れて行かれる様を苦笑いで見ながらついて行くマルタとチャット。

1階の中央に備え付けられた立派な最上階直通のエレベーターに乗っすぐ

「今回はまた機関部の点検だそうで？」

「はい。あと、人数が増えてき始めたので簡単にで構いませんが船内全体も見えておいてくれませんか？」

「わかりましたが、どうするか決めるのはリーガルさんです」

「で、ですよね」

「プレセア、相変わらず会話が續かないわよね」

「お土産ぐらいないんですか、マルタさん」

「げ、たかつてきたよこの子」

ジーンと物欲しそうな目でマルタを眺めながら呟くプレセア。  
そのあまりにも堂々とした態度に若干引きつつ何も出さないマルタ。  
しばらく気まずい沈黙が続いたが、エレベーターが到着し扉が開く  
と同時にその緊張の糸は切れるのだった。

「着きました。最上階の会長室です」

「リーガルさんとは久々だなあ」

そわそわするチャットに誰も何も言わず進んでゆく。  
そして正面に見えた大きな扉を開くと、そこには刃物を持った男性  
が――

「！」

「ダンボールはありませんから、意味無いですよ会長」

まあ単純にMY包丁を持っていただけのリーガルがそこにいた。  
独特の効果音とともに驚く表情をするがプレセアのドライな反応に  
よって封殺。

咳払いして包丁をしまうと向き直る彼はようやく普通の笑顔を見せた。

「やあ、久しぶりだなチャット。そしてマルタ。その子は新人かい？」

「はじめまして、リーリアです」

「ああ、よろしく。今回は船の整備でいいんだな？」

「はい、それと人数が増えてきたので全体的にも見てもらえると助かるんですけど……」

チャットの依頼に彼はにこやかな表情のまま顎に手をあて頷く。

そのしぐさを見てマルタとプレセアはため息をついた。

「ああ、もちろん引き受けよう。その代わりに頼みがあるんだが……聞いてもらえるか？」

……

「……古の文明が残した幻の技術で建造された船、バンエルティア号」

その頃レザレノカンパニー本社ビルの近くに停泊していた船を見上げ呟く男性がいた。

背筋を伸ばし、腰に剣を携えた鳶色の短髪を風になびかせた男性。

「アドリビトムになんか用でもあるのか？」

その男性に声をかけたのは、甲板の手すりに腰掛け空を眺めていたリッドだった。

「自由の灯……か。良い名だ」

「あ、オイおっさん？」

男性はフツと笑ってカンパニー内へと歩み去った。

リッドは不審に思いはしたが、そこまでで、結局昼寝を優先するため部屋へと戻っていくのだった。

.....

「本気ですか！？」

「男に二言はないさ。プレセアともう一人護衛をつけるから許せ」

「プレセアの実力は私が保証するけど……もう一人って誰のことですか？」

マルタの疑問に答えたのはリーガルでもプレセアでもなく、背後から聞こえた低い声だった。

「すまん、遅れたな。私があるもう一人だ」

振り向けば紫を基調とした服装とマントに身を包む赤毛の男性。彼はそのままスタスタと歩み寄り、リーリアの横を通り過ぎようとして驚いた目をして立ち止まる。

「お前は……………！！　そうか、時が来たのか」

「ほえ？」

しかしそれ以上は何も言わずリーガルの横に立ち振り返る。

「私はクラトス・アウリオン。今回はリーガルの召集に応じてここに来た」

「先ほど言ったもう一人の護衛だ。チャット、これで問題は無いだろうっ？」

「ぎ、業務に差し支えは…………？」

「私の外出程度で差し支えるのならザレノはとっくに終わってい

るよ」

不安そうなチャットの疑問にハッハッハ、と笑って流すリーガル。プレセアとクラトスは呆れたように溜息をついていた。

「まあそうよね。チャット、話も済んだんだし早く行きましょ」

「マルタさん……行動が早過ぎですってば!!」

すぐに行動を開始するマルタを慌てて追いかけるチャット。

「若いな。だが、それゆえに無限の可能性を持っているのも確かか」

「正しい時間の流れの中で生きる事は、どんな形であれ素晴らしい事だと思います」

元気にエレベーターへ向かう彼女らを遠く感じるような視線で見つめるクラトスとプレセア。

リーリアは先ほどまでの話の内容はちんぷんかんぷんだったが、この2人の発言には興味を持ったらしい。

「2人って普通じゃないの？」

「「!?!」」

そのあまりにも直球な質問に驚きを隠せなかった2人だが、プレセアを小さく微笑んで答える事無く一同の後を追う。

クラトスは微笑みこそしないがリーリアの頭を撫で、背中を押す。

「時が来れば話す機会があるかもしれん。だがそれは今ではない…」

…行くぞ、置いて行かれる」

「う、うん」

その前を見据える眼差しこそ熟練の剣士そのものだが、細かい部分で世話焼きなのはちよつとお父さんっぽいな、と思ったリーリア。まあ恥ずかしいから口には絶対にしないのだが。

………

「「「うまー……い……!」」」

その日の夜、バンエルティア号の食堂は感動と美味しい匂いに包まれていた。

「挨拶の代わりになればと思ったのだが……気に入ってもらえたよ  
うで安心だ」

「リーガルさん、料理お上手なんですね!」

「うめえ……うめえよ!! これでこれからは安心して飯が食える  
!」

「あのレザレノの会長さんなのに、お料理も心得ているなんて……  
素敵だよね、シヨコラ」

「ああ、これは……確かに美味しいね。見た感じMY包丁も持ってたし……良いライバルかな」

ルカは嬉しそうに、リッドは感動しっぱなしで、カノンノはシヨコラと共に美味しくそうに食事中。

厨房の奥では満足そうに頷くリーガルがファラやマルタ、ティア達女子組と話していた。

そんな楽しい雰囲気の間で、リーリアはいつもより少なめの量で食事をやめてクラトスの前に立っていた。

「どうした、もう食事が済んだのか」

「うん。美味しかったし、リーガルにもちゃんとごちそうさま、って言ったよ」

「そうか。ならばなぜ私の前にいるのだ？」

「ボクを弟子にしてください!!」

父親のようにリーリアを見ていた彼だったが、彼女の弟子入り希望を聞いた瞬間雰囲気が変わる。

あまりにも変貌したその雰囲気に一瞬吞まれそうになったリーリアだがなんとかふんばり彼を見続ける。

「なぜ、私なのだ」

「うーん……勘、かな」

「なぜ、強くなりたいのだ？」

「ボクはボクの事を知りたい。その為にはいろんな所に行かないといけないし、その為には強くないとダメでしょ？」

彼もまたリーリアを見る。

小柄で、まだまだ子供っぽさの抜けない可愛らしい少女。  
だが、その瞳からは並ならぬ覚悟を感じる事が出来た。

「ならば、私にお前の覚悟と力を見せてみる」

だからなのか、クラトスは壁に立てかけていた鞘に収まった剣を取って立ち上がりリーリアを見下ろす。

彼女は彼女で臆することなく彼を見上げる。

「1時間後、甲板で待つ。武装などは好きな物を選ぶと良い。ただし、お前1人だ」

「もちろんだよ!!」

食堂で唐突に交わされた約束。  
当然ながら周りのみんなもそれを聞いていた。

この2人の決闘はあっという間に知れ渡り、船内は期待と不安でざわつき始めるのだった。

## 6・鉄人シェフ、現る！？（後書き）

リーガル「レザレノ・カンパニー会長のリーガル・ブライアンだ」

プレセア「その秘書、プレセア・コンバティールです」

クラトス「クラトス・アウリオン。傭兵だ」

カノンノ「なんか3人共真面目な方ですね」

プレセア「それ以外に言う事も無いですし。ちなみに年齢は聞かないでください……私とクラトスさんはややこしいので」

カノンノ「それなんてネタバレ！？」

シヨコラ「次回はリーリアとクラトスの決闘だそうじゃないか」

カノンノ「だ、大丈夫かな？」

クラトス「殺しはせん」

一同「「「当たり前です！」「」「」

シヨコラ「じゃ、いつものコール、いってみよー」

カノンノ「未来へ導け、ココロの光、夢見る翼！ー」

リーリア「最近ボク影薄くない！？　それとオマケみたいで嫌で  
けど、ボクのイメージＣＶとか募集してるよ」  
本当ですw

7・「能ある鷹は爪を隠す」ってよく言っよね（前書き）

今回は半分ほど戦闘です。

クラトスvsリリア

そして後半にはついにあの人の不気味な笑い声が……！？

7・「能ある鷹は爪を隠す」ってよく言っよね

この夜は風が強かった。

食堂での一件でざわめく船内。

話題はただ一つ。

『弟子入りを賭けた決闘』だ。

甲板にはその決闘を見ようとほぼ全員が集まっている。

そしてその中心、鳶色の短髪を揺らす剣士と桃色のツインテールの少女が向かいあっていた。

「今後私がお前を指導するかどうかはこの一戦で全て見極める。全力でくるといい」

「ボクはボクの記憶の為に強くなる。だから、絶対に認めさせてみせるよ」

少女、リーリアは右手に剣、左腕に盾を装備していた。

対する男性、クラトスも同じ武装。

「えー、なぜか審判を頼まれたので早速始めたいと思います」

2人に挟まれるようにして立っているのはジェイドだ。

ひょうきんな口調とは裏腹にその瞳は鋭く2人を見つめている。  
そんな彼の言葉に従い剣を抜く両名。

その様子を、少し離れた場所でカノンノは見つめていた。

「では、これよりリーリアとクラトスの決闘を始めます。両者構え」

暴風と共に響く声。

構え、と言われた瞬間にその場の空気は凍りついたように張りつめた。

真っ直ぐリーリアを見つめるクラトス。そして、そのリーリアは今までのかわいさを全て捨てたかのように真剣な眼差しで彼の剣先を見ていた。

「はじめ」

ぼそりと呟いたにもかかわらず、2人の踏み込みはほぼ同時だった。

初手は両者共に鏑迫り合い。

「む……小柄だというのに、重いな」

「言つたよ？ “絶対に認めさせる” って」

クラトスの剣を押し返し一度バックステップで下がったリーリアは瞬時に緑の魔方陣を展開する。

それを見た彼は、移動せず魔法への対処を優先させた。

「「ライトニング!!」」

ぶつかり合う雷撃

それにより起きた眩い閃光の中で3度刃同士がぶつかる音が響いた。

「リーリア!!」

思わず叫んだカノンノだが、目の前の様子を見て驚愕した。

「剣が……？ まさか、ここまで力をつけていたか」

「まだまだよ、まだ……終われない!!」

2人共自らの手から剣が離れていたのだ。

それでも2人は戦うことをやめたりはしない。

剣が使えない代わりに魔方阵を展開し詠唱を始めたのだ。

「バーンストライク!!」  
「サンダーブレード!!」

クラトスに炎が、リーリアに雷撃が。  
だが2人はお互い前に飛び出し回避。一瞬にして立ち位置が逆にな

った。

しかしそれも一瞬、前方へと飛んだ勢いをそのまま使い駆けた両者は互いの剣を拾って再度ぶつかった。

「ッダア!!」

「——ムッ!!」

気合と若さでクラトスに剣を振るい続けるリーリア。

そして反撃としてクラトスが薙ぎ払うようにして横に一振りした時だった。

その試合を見ていた一同は驚き、クラトスでさえも予想外の出来事が起こった。

振った剣が戻るその時、上に飛んで回避していたリーリアが着地したのは彼の剣の上だったのだ。

しかもその一瞬の間に彼女は片足で剣の上に立ち空いたもう片方の足で彼の顔面を蹴り飛ばす。

自身のマナを足に集中させていたのだろう。

小柄な少女が大人を蹴り飛ばすには十分な威力が備わっていた。

吹き飛ぶクラトス。

甲板の壁に激突することで彼の体は止まった。

「リーリアって……こんなに強かったっけ………?」

この船に拾われてからずっと彼女を見ていたリッドでさえ、開いた

口がふさがらないままその光景を見ていた。

しかしこれだけでは終わらない。

再び一同がどよめきを見せると、クラトスはより一層顔を引き締めた様子で当然のごとく立ち上がった。

そして剣を握り直すと真っ直ぐにリーリアへ距離を詰める。

「さすがだな。今の一撃はよかったぞ……やはりこうでなくては、な！―」

リーリア side

見える。

動く。

頭の中がスッキリして、クラトスが次に何を仕掛けてくるのかが予測できる。

なんだろう、この不思議な感じ。

クラトスとは今日初めて会って、初めて戦うのに……胸の辺りが温かくなる感覚。

知ってる

また剣を構え接近してくるクラトス。  
でも悪い癖だよ……真っ直ぐ相手を見て正面から堂々と仕掛けてくるなんて……さ。

ボク、この人を知ってる……

打ち付けてくる剣の重みも、顔が迫ってくる時に聞こえる息遣いも彼の無駄のない磨き上げられた綺麗な戦い方も、なにもかも。

「ボクは……………この人を、知ってる？」

リーリア side end

それからしばらく、今までに見たことのないくらい素晴らしい動きを見せるリーリア。

そんな彼女をさらに追いこんでいくクラトス。

この2人の決闘を見て、カノンノは何となくだが“懐かしい”と感じていた。

「なんでだろう……2人を見ると、凄く懐かしい気がする……」

体が熱を帯び始めていた。

中から沸き起こる『戦いたい』という衝動。

それはわくわく感そのものだった。

鳴り響く金属音。

舞っているようにも見える鮮やかな攻防を繰り返す2人。

ただ彼女も思っていた。

（私……きつと2人を知ってたんだ……私の欠落した記憶の中のどこかで!!）

それは予想ではなく、確信。

彼女は単純に嬉しくて涙をこぼしていた。

.....

「「魔神剣!!」」

「「ファイヤーボール」」

「「風雷迅剣!!」」

肩で息をする2人。

だが、汗の量や呼吸の深さでいえばリーリアの方が圧倒的に疲れを見せていた。

「……フツ、終わらせるとしようか。この一撃を最後の見極めにし  
てやる」

「こ……………こい!!」

そして広がる白の魔方陣。

詠唱を始めたクラトスに対して、リーリアはもうそれを妨害するだけの力は残っていなかった。

しかし、諦めなどどこにも見当たりはしない。

「ジャッジメント……!!」

降り注ぐ純白の光。

リーリアは残る力全てを脚部に注いで駆けまわり回避を続ける。

しかし、経験の差がここにきて現れるのだった。

「——ッ!？」

ヒュッ、と彼女の前を高速で通り過ぎる金属。

それは先ほどまでクラトスが握っていた剣だった。

それに驚いた彼女は思わず足を止めてしまったのだ。

「しまった!!」

だがもう遅い。

一度その光に当たってしまえばもう逃げられはしない。

一発、また一発と被弾し激痛が奔る。

その数秒後、ジャッジメントの光は終わった。

残ったのは立ってリーリアを見下ろすクラトスと、汗まみれで倒れていたリーリア。

「勝負あり。クラトスの勝利……ですかね」

一同は10分ほどの決闘を見ただけで啞然とし、何も言えずただ倒れうなだれていたリーリアを見ているのだった。

「……………ん」

「目、覚めたんだ」

「うん……ここって……？」

「医務室だよ。決闘……負けちゃったね」

あの決闘から一夜明け、次の日の昼にリーリアは目を覚ました。

最初に話しかけてきたのはカノンノ。彼女は優しくリーリアの頭を撫でていた。

「けど……嫌な気持ちじゃないんだ。なんだか懐かしいような……温かいような……そんな気がした」

「実はね、私も2人の決闘を見て……なんか懐かしいって感じがしたの」

「ホント？」

「ホント♪」

嬉しそうに驚くリーリアにつこりとほほ笑むカノンノ。それを医務室の入り口でそっと見ていたルカ。

「リーリアはもうなんともないみたいですね」

「そうか。やり過ぎていないかだけが心配だったのな……」

「ご自分で尋ねればよかったんじゃない？」

「……いや、今は必要以上にあの2人と関わるべきではないのだ」

「はあ？」

「いずれわかる」

顔を合わせなくなかったのかルカに様子を見てもらっていたクラトスは厳しい顔つきで去っていく。

結局ルカは1人残され、後から来たジェイドやイリヤに覗き魔呼ばわりされることになるが、それはまた別の話だ。

.....

「特に異常はないみたいですよ、会長」

「そうか。では報告書の作成を頼む。それが終わり次第帰宅してかまわんよ」

「はい、失礼します」

リーガルは決闘を見た後すぐに機関室に顔を出し、それからずっと

整備点検の様子を視察していた。

そして作業が終わると、連れてきていた技術者にねぎらいの言葉をかけ、笑顔で残りの仕事を任せる。

「異常はないそうだ。さすがはアイフリードの所有していた船だけはある。毎度訪れる度にこの完成された構造には感心させられるな」

「ブライアン侯爵にそうおっしゃって頂ける事、光栄です。で、今後はやっぱり？」

「ああ。先ほどのクラトスとの戦いを見てあのリーリアとかいう子に興味がわいたよ」

「やっぱり……では、明日には依頼を受けられるように登録しておきますね」

「世話になるよ、キャプテン」

こうしてリーガル・ブライアンのアドリビトム加入が正式に決定した。

.....

「姉さん、いい加減進まないといつまで経ってもロイド達に追いつかないよ」

「待て。貴様この遺跡を調べずにロイド達を追いかけると言うのか！？」

「だから遺跡は動かないんだから後で好きなだけ調べればいいですよ」

「何を言ってるのだジーニアス！！ 遺跡調査とは常に一期一会。その時にしかわからぬ事がきつとあるはずなのだ！！」

深夜、高らかな笑い声を響かせて女性は何跡を見上げていた。その隣にはうんざりそうな少年の姿も見える。

「どうでもいいから。僕たち2人じゃもし魔物に襲われても前衛がいないんだよ？」

「シャッラーーープ！！ ジーニアス、お前はこれから歴史を学び直してこい」

「僕先に行くからね」

すでに彼女はジーニアスと呼ばれている少年の声など聞いていない。諦めて本当に先に行こうとしたところで、目の前にイノシシのような魔物サイノックスが現れた。

「言ったそばから！？ ねねね、ねーさんってば！！」

だが、やはり聞いてない。

とりあえず逃げようとした時だった。

「その君、しゃがむか高速で逃げるかしてちょーだい!!」

女の子の聲がしたかと思えば、同時にサイノックスが無数の矢で射ぬかれ、直後炎がそれを焼却した。

「チエスター、ぐっじよぶ」

「つるせえな。テメーこそ相変わらず凶悪な発動タイミングしてやがるぜ、アーチェ」

「いえーい、とでも言うかのようにハイタッチを交わしていた少年と少女。

あまりにも一瞬の出来事に硬直していたジーニアス。

「ジーニアス、何をボサツと座ってるのかしら。助けてもらったお礼ぐらい言えないの?」

「姉さん……姉さんには言われたくないんだけど」

その変な空気を破ったのはおとなしくなったりリフィルだった。そしてふとチエスターと呼ばれた少年とアーチェと呼ばれた少女とリフィルは目が合う。

「「「あ……………」」」

「姉さん？」

口をアングリと開いていたチェスターとアーチエ。  
そんな2人を見てリフィルは小さく笑うのだった。

「あら、どうして2人がここにいるのかしら？ チェスター、アーチエ？」

「いやあ、あの……クレスのヤローに頼まれてだな……………」

「リフィルってばどうせ途中で遺跡モードになるだろうから密かに護衛しろって言われただけだよ！？」

「姉さん……………情けないよお」

するとリフィルはとぼけたような顔をして一人進んでいく。

「私が寄り道なんてするはずないでしょう？ さ、貴方達の行動への問い詰めは後にしてロイド達に追いつきましょう3人共」

（（（あんたが言っなよ…………）））

うんざりした様子でジーニアス、チェスター、アーチエはリフィルを追いかけるのだった。

7・「能ある鷹は爪を隠す」ってよく言っよね（後書き）

リフィル「ふふふ……………ふはははは！！！！」

天才「姉さんさっきからうるさいよ……………てかもう僕なんか字数の關係で名前表記が日本語訳だし…………orz」

狩人「安心しろって。俺なんか某2人組歌手だぜ？」

アーチェ「乙。8時丁度のあずさ2号で帰れば？」

カノンノ「あはは……………なんか向こうは盛り上がってるね」

リーリア「超疲れたあ……………」

クラトス「まだまだ伸びる」

リーリア「ちっこいって言うなあ————！！！」

クラトス（身長の話ではなかったんだが……………な）

カノンノ「まあいいや。収集つかないからクラトスさん、アレ言っちゃってくださいっ」

クラトス「……………どうしても私か？」

カノンノ「……………（コクリ）」

クラトス「み……未来へ導け、ココロの光、夢見る翼」

カノン「感想待ってまーす♪」

## 8・初めてのマトモなお仕事!!（前書き）

今回は戦闘が少々。

前回のクラトスvsリーリアは感想が無かった辺り、あまり評判がよろしく無かったようですな。

すみませんでしたm（——）m

さ、今回は短いですが無気を取り直して本編へGO

## 8・初めてのマトモなお仕事！！

クラトスとリーリアの弟子入りを賭けた決闘から一夜明けた今日。

バンエルティア号のホールには人が集まっていた。

「と、いうわけで今日は仕方なく合流の遅れているリフィルさん達を探しに行ってもらいます」

「着いて早々の依頼でごめん。でもまあ頼りになる先生だから誰か一緒に来てくれよ」

「私からもお願い。ジーニアスもリフィル先生も心配だからね」

やれやれといった様子のチャットの隣、今朝このバンエルティア号に合流した2人組ロイドとコレットが申し訳なさそうに立っていた。

「今回はジェイドさん達の方からもナタリア王女の搜索依頼が出ているのでそちらも同時に行います。で、メンバーですが面倒なので僕が決めさせてもらいました」

「いやー、若い人たちの手を借りなければ人探しもできない大人でどうもすみませんねー」

「大佐、嫌味にしか聞こえませんか」

「はて、なんのことやら」

依頼主であるジェイドはわざとらしく謙り頭を下げる。その隣でテ

イアは呆れたように彼を窺っていた。

そんな2人に苦笑しつつもチャットはメンバーを発表する。

「さて、みなさんの良い報告を待ってますよ!!」

.....

く古代遺跡イザヴェルく

エルナ王国の南西、アイルーナ大森林の北の辺りに堂々と建てられているピラミッドのような遺跡。

現在パーレム王国北部の上空に滞空しているバンエルティア号にリフィルやジーニアスがエルナ王国から合流を目的に移動するのであればここを通るはず、と予想したため今回はここに訪れた。

チャットの決めたメンバーは、ロイド、コレット、リーガル、リーアの4人だ。

「んゝクレスの話じゃアーチェとチェスターに追跡させてるって話なんだけど……」

「なんでリーガルさんはタンクトップにズボンなんですか？」

「洋服で戦うなど普通はしないだろう？ コレットも知っての通り私の戦術上この格好が良いのだ」

「リーガルさんムツキムキだあ!!」

コレットと話をしているリーガルの露出した筋肉を触って何やら喜んでるリーリア。

その横で現場に到着したロイドは困ったように唸る。

ちなみに彼の言うクレスという人物はエルナ王国の騎士である。

グレルシールと同じく、エルナ王国にも騎士団なるものが存在する。ただしエルナの場合は魔法を扱える騎士が多い為事実上魔法騎士団と呼ばれているのだ。

グレルシールの騎士団長がフレンならば、エルナの騎士団長はクレス。

ただし、彼は魔法を扱えないと言うロイドと同じく異例の騎士。だというのに騎士団長を務めている彼の評価は目を見張るものがある。ちなみに副団長はリオン・マグナスという少年らしい。

そしてロイドはクレス直属の部下。

チエスターやアーチエは騎士団の中でも後方で活躍するクレスの大事な友人だという。

「まあ先生のことだし遺跡の中で笑ってるんだろうな……あー怖い」

「せ、先生は真面目な人だよ……遺跡モード以外は」

「コレットよ、まったくフォローになってないんだが。いやそんなことよりも調査を進めよう」

「うんうん♪そんじゃ遺跡探検だー!!」

と昨日の決闘での疲れが嘘のような元気をまき散らして遺跡内に駆

け込んでいくのだった。

それを笑顔で追いかけるコレットとロイド。そしてリーガルはそんな少女達を穏やかな眼差しで見守るのだった。

.....

「ウルズ湖」

「あの、カーティス大佐……こんなところに誘拐した王女様を連れてくる人なんていないと思うんですけど……」

「はて、なぜそう考えるんです？ カノンノ」

ロイド達が遺跡に突入したのと時間を同じくして、パーテムの北西に位置するウルズ湖に来ていたジェイド達。

メンバーはジェイド、カノンノ、ティア、ガイという4人。

そしてカノンノの考えに根拠を求めるジェイドは目を細めて周辺の草むらに視線を注いでいた。

「私、旅をしていた5年間の間にこの世界の行けるところはほとんど行ってみたんです。その中でも特にこのウルズ湖って見晴らしがいいです。湖は結構面積がありますけど、深さだってそんなに深くない。少人数で隠れるならまだしも、王女誘拐で隠れるには適しません」

彼女のこのきつぱりと意見を述べる姿勢に3人は驚くと共に感心していた。リーリアと似てカノンノもまたあまり失敗を恐れるということを知らない。いや、知らないというよりはむしろ気にならないと言った方がいいのかもしれない。

「なるほど……そのハキハキとした物言いは私結構好きですよ。若いのに素晴らしい事ですねぇ全く」

「というത്？ カーティス大佐は私の意見にあまり関心が無いように聞こえます」

するとジェイドはさわやかな笑顔を浮かべてハハハと笑う。

「いえいえ、関心が無いのではありません。単純にその考えを立てる前提が違うということです」

「どういうことですか？」

「私たちがいつ”大勢に襲われ王女をさらわれた”と言ったんです？」

カノンノは思わずティアやガイに視線を送るが、2人とも黙って話を聞いているだけ。

それでもジェイドは気にする事無く説明を続ける。

「わざわざここに狙いを定めて来たのには理由があります。1つ、犯人は1人。2つ、犯人は相当頭がキレる人物だということ。こちらがカノンノさんのように考えた場合を想定してあえてここに身を隠す。まあ私にはお見通しでしたがねえ」

そして言い切った直後、彼は緑の魔方陣を展開してカノンノの背後の草むらへと指を鳴らした。

「タービュランス」

下からの突風で巻き上げられたのは2人の男性。しかし、次の瞬間にはその2人は煙のように消滅した。

「おや、偽物でしたか…… 3人とも警戒を怠らないで下さいよ？」

「了解」

「は、はい!!」

厳しい目つきになったジェイドはカノンノを守るかのようにティアとガイを配置させ周囲の草むらが激しく揺れるのを眺める。

そして近くにあった湖の水が一度大きく音を鳴らして吹き上がったと同時にヒュンという音が高速でなり始めるのだった。

「なんだ、こりゃ一体全体どう言う状況だ!？」

「ガイ、冷静に。ウィンドスピリッツが……… 山ほどデス」

「ティアさんも冷静にお願いしますー……っ!!……!!」

ヒュン、と言う音はどうやらウィンドスピリッツのウィンドカッターが連発していただけだった。

「面倒ですねー。ガイ、前へ出て囿になってください」

「前衛俺だけ!？」

「私も出ますから行きましょーよお、ガイさん」

「どっひいー！ー!!」

前衛としてカノンノがガイを連れて行こうとした途端、ガイが顔色を変えて飛びのいた。

そして再び彼女が近づく前に彼は敵の群れへと突撃していった。

ちなみに彼がひそかに爽やかな涙を零していたことをジェイド以外気づかない。

「実に面白いですよねー彼。ささ、どうやらハズレだったみたいなので片付けますかねえ」

ジェイドはそんな様子を余裕の表情で眺めていた。

ティアはその後、しばらく混乱し続けていたが戦闘は完璧にこなしていたところ、さすがと言っべきだろう。

「にしても……この辺りは魔物が少ないうえに植物系が多いと聞いていましたがどういうことか……」

呟きながらも突き刺さるような視線で敵を見るジェイド。

彼は少しずつではあるが、世界の異変に気付き始めていた。

.....

リーリア達が遺跡内に侵入した頃、バンエルティア号には来客が来ていた。

「到着が遅れてごめんなさいね。私はリフィル・セイジよ」

「弟のジーニアスです」

「エルナ王国騎士団奇襲隊のチエスターだ。クレスやロイドから話ぐらい聞いてるだろ？」

「同じくアーチェーす」攻撃魔法が得意だよ」

「あちゃあ……………」

「なんとなく予想してたさ。気にすんなって…………修行って事にしまえよ」

ホールのカウンターでガツクリと肩を落とすチャット。  
そんな彼女をリッドは温かい目で肩を叩き慰めていた。

そんな様子を見て状況に感付いたジーニアスはチャットに頭を下げる。

「（姉さんが迷惑かけて本当にすみません…………）」

「（い、いえ…………お気になさらず）」

見た目同年代なジーニアスに励まされるのも何か嫌なので彼女はリフィル達を部屋へと案内するようリッドに伝えるのだった。

「んゝあの遺跡では良い噂をあまり聞かないので少々心配ですが…  
…まあ大丈夫でしょうね」

彼女はこの時、この不安が的中することを知る由もない。

## 8・初めてのマトモなお仕事!!（後書き）

ロイド「よ！俺はロイド・アーヴィングだ」

コレット「コレット・ブルーネルです」

ジーニアス&リフィルは割愛。

カノンノ「みなさんはTOSからの出演ですよ。今後の展開が楽しみです!!」

ジーニアス「でも姉さんはしょっぱなから良いとこなしたよね」

ロイド「遺跡モードはどうしようもないだろ……諦めようぜ」

リフィル「2人共、今度美味しい料理をごちそうしてあげるわ」

2人「まさかのお仕置き内容!?!」

リーリア「なんか騒々しいなあ。で、作者からお知らせだって!!」

カノンノ「えーとなになに……え、私の中の人、作者さんが勝手に決めちゃったの!?!」

うん

リーリア「だれだれー?」

ふふふ……それは!!

リーリア「それは!？」

続きはwebで……………と、言いたいがクラトスの目が怖いから発表するお(^^)

カノンノ・ソリユーラのイメージＣＶは

喜多村英梨さんだあああああああ!!!!!!

声のイメージとしては「カオス；ヘッド - CHAOS；HEAD  
-」より咲畑梨深です。

私としてはほぼ間違いなくあるであろう4作目のマイソロカノンノ  
はこの人がいいなあと言う願望も混ざってますw  
歌上手ですし、いけるっしょ!!

文句、他イメージＣＶのご意見があれば受け付けますwww

そして以前からですが、リーリアのＣＶのご意見も引き続きお待ち  
しておりますm——m

ちなみに現在、ゴトウーザ様と言う意見が出ております、はいwww

では、次回の更新でお会いしましょう

## 9・ゆけゆけ僕達、新ダンジョン進み隊！！（前書き）

はじめに「織り成す」と並行して進めるとか言いながら停滞していた事を深く謝罪いたしますm（――）m

今後はもう少しマシな更新頻度になると思いますので温かく見守っててください。

ではどうぞー！！

## 9・ゆけゆけ僕達、新ダンジョン進み隊！！

いるはずのないリフィルとジーニアスを探すため遺跡調査を始めたロイド達。

薄暗い中、周囲への警戒を怠らず慎重に進んでいた一向の現在の陣形はいたってシンプル。

前衛にロイドとリーガル、中衛にコレット、後衛にリーリアだ。

基本的に進んで行く度に前方から魔物が出現するのだが、稀に後方からの奇襲や死角からの強襲などがあつたためリーリアを後衛に配置。

ちなみにリーリアにはコレットの起こす”まさか”の事態に備えてもらう役割もあつたりする。

「暗くてジメジメして変な臭いがする……使われなくなったトイレみたいだよな」

「例え方悪っ！！　せめて廃墟とか山小屋とか言おうぜ！？　なんでトイレとか具体的なんだよ……」

「リーリアはきっとトイレが好きなんだよ」

「いや、単純にカビ臭さや遺跡に使われているレンガなどの土の匂いのせいだと思うが……？」

恐る恐る進んでいた一行の後方からリーリアの能天気な一言が飛んてくる。彼女のその例えに驚きつつ顔をしかめるロイド、ニコニコと相変わらずズレた事を言うコレット、そんな彼らに苦笑するリー

ガル。若干の戦闘などで緊張するとはいえ、リーリアやコレットの  
おかげで随分楽しい探索になっていることは事実だった。

（これも、リーリアの持つ天性の明るさか……？ いや、しかしあの無垢な瞳は……）

振り返るリーガルは変な鼻歌を歌いながら大股で歩くリーリアを見て思う。

ロイドやコレットはある程度の戦闘を経験しそれなりに実力を持っているからこそ緊張を解きはしないが、リーリアは全く違う。いついかなる時も楽しそうに笑い、一つ一つの出来事に驚き、興味を示す。そして学習し休む暇なく自らの経験として積み上げ、より大きな笑みに変えて歩いているのだ。

その姿はまるで――

「まるで、生まれたばかりの精霊だな」

「ん？ リーガル、どうかしたのか？」

「いや、なんでもない。ロイドの方はなにか見つかったか？」

「いんや、さつぱり。誰かが入った形跡もなきや、魔物の気配さえほとんどないよ」

思わず漏れた呟きに反応したロイドだが、リーガルはその話題に触れぬよう話を変える。

すると彼も特に気にしなかったのか正直に周囲を見渡しありのままを報告する。だが、魔物の気配がほとんどないというのはあまりにも不気味だ。

「ワンちゃんもいないし……そうだ、リーリアお手!」

「わんっ ♪」

「おかわり!」

「わんわんっ ♪」

「ピコハン ♪」

「え?」

突然始まったコント。

楽しげにブリーダーごっこをしていたコレットとリーリアだが、突然の言い間違いに仰天するリーリア。

せっかく可愛らしく撫でられていたリーリアだったが、降ってきたピコハンを避けるため飛び退く。

「おわっ!」

当たらなかったピコハンはそのまま遺跡の床に落ち、終わる……か  
と思いきや、ピコハンが落ちた所の床が不自然な形で崩れ、その瓦礫の下から新たな階段が見つかった。

「すげえ……コレット恐るべし」

「うむ、やはりいつ見てもコレットの天然さには毎度驚かされるな」

「ほあ、これってもしかして新ダンジョン!」

「間違えちゃった……って、みんなどうしたの？」

驚き感心していた中、コレットだけがいつも通りの天然さと奇跡を振り撒き状況についていけていなかった。そんな彼女はさておき、変化がなさそうな現在のフロアよりも新しく出現した階段を下りる事に決めた一向は自然な足取りで進んでゆく。

ロイド達が思っていたよりも階段は長く、深い位置に伸びていたらしく湿度がより上がったのが目に見えていた。

汗が止まらない。頭がボーっとする。息が苦しい。

「これ以上深くへ進むのはやめた方がいいだろう。それなりの準備が必要になる可能性が高いぞ」

「ああ、そうだな……もしこんな所で戦闘になったら俺、ヤバいかもしれねえし」

「暑いね……着替えたいよ」

相変わらず冷静なリーガルはさらに目を細め眉間にしわを寄せたままこれ以上の探索を打ち切るよう提案する。体力的にも限界に近かったのかロイドやコレットも頷いて引き返そうと階段を下りるのを止めて上り始めたら、リーリアとすれ違った。

「リーリア、これ以上は危険だぞ」

「……ごめん、先に戻っててよ。ボクもすぐ追いかけるから」

ロイドの言葉など聞き入れず、彼女は剣を抜いてさらにスピードを上げて階段を下りていく。

困ったような顔をして見つめ合うロイドとコレットの横、リーガルは黙って小さくなってゆく彼女の背中を見る。

「ロイド、コレット、お前達は先に戻っている。彼女は私が責任を持って連れ帰る」

「あ、おいリーガル？」

「ロイド……任せよう？ 私ホントに気分が悪くなってきたよ……」

リーガルを呼びとめ追いかけてようとしていたロイドだが、顔を青くしたコレットに腕を掴まれた為断念しチラチラち階段の奥を気にしながらも戻り始める。コレットは顔色が悪いだけでなく、微かに歯を鳴らし身体を震わせていた。

「おいコレット、大丈夫か？」

「なんだろう……奥から凄く嫌な感じがする。寒くて、暗い……なに、これ……怖いよロイド」

彼女の様子に緊急性を感じたロイドは少し踏ん張って彼女を抱き上げた。

そしてそのまま急いで降りてきた階段を上り外へと向かう。

「リーリア、何を感じたのだ!？」

「わからない……でも、誰かがボクを呼んでる気がするの!！」

ロイド達とは逆に、もはや落ちるような速さで階段を駆け降りるリーリアにリーガルは付いていくのに必死だった。彼女の小柄な体のどこにこれほどまでの力が隠されているのだろうか。クラトスとの決闘の時もそうだ。彼女の戦闘技術と戦いの中で見せる恐るべき瞬間判断能力、純粋なマナの力、そしてやはり絶えなかった好奇心旺盛な眼差し。

自らリーリアと名乗るこの少女には謎が多い。

しかし、近くにいるリーガルからしてみれば元気を分けてもらえていのような気もする。

（不思議な少女だ）

そう思っていたリーガルは、遂にリーリアとほぼ同時に階段を抜け広い空間へ出るのだった。

（だが、悪くない）

そう思いながら。

その空間は広がった。

降りてきた階段の長さを考えれば遙か彼方にあるような気さえする天井にも納得がいく。壁面には様々な描写がされており、岩を削って作っているからから風化して所々わからない。

階段に満ちていた強烈な湿気の正体はこの空間の奥の中心に見える巨大な滝。天井に近い位置の壁にポツカリと空いた穴は地下水路らしく、そこから流れ出す水は勢いも十分に大きな音と水しぶきをあげて重力に従い落ちていく。

下で激しく波打ち揺れている水は床に掘られた無数の浅い水路を通じて色々な方向へと流れてゆく。その内の一つが、階段のすぐそばに伸びていたのだ。

ここまで水が沢山あるというのに、この空間は階段とは違って爽やかな空気で、水草も生息しており、様々な昆虫や魚なども確認できるほど自然の状態だった。

「この遺跡に、このような地下があるとは驚いたな……」

「ボクを呼んだのは誰！？ この空間に満ちてるこのおかしなマナの正体は何！？ いるなら答えて!!」

呆然とするリーガルを無視して彼女は空間全体に響かすように声を張り上げて叫んだ。

その内容に関して疑問に思ったりリーガルだったが、追及は後からでも出来ると判断し今はこの流れに身を任せ状況の行方を見届けるよう意識を集中させる。

すると、答えはすぐに帰ってきた。

「ここは大昔に使われていた神殿イザヴェルの本殿だよ。当時のここは水の都として有名だったのに」

声は滝壺から聞こえてきた。

次の瞬間には滝が2つに割れ、その間からつつすらと発光した謎の膜に覆われた1人の少女が現れる。

小柄で声が高く、桃色のお尻まで届くであろうツインテールを持つ少女。

鋭い眼の中に収まっている瞳はリーリアの赤に対して彼女は金色にきらめいている。

ニヤリと企んだような笑みを浮かべ鋭い犬歯をちらつかせる彼女は胸の前で腕を組んで悠然と床に足を付けた。

そして彼女が顔を上げたところで、リーガルは目を疑った。

「もう一人の………リーリアだと!？」

呼ばれた金の瞳の彼女は鋭い目つきから一変、狂ったような笑みを浮かべてキヒヒと笑う。

「不愉快だけどアンタの言う通り私はそのチビの半身だ」

「ボクの……………半身？」

「そう、アンタが持たなかった残りのモノを全て引き受けた存在が……………このボクなのさ」

そっいつて親指で自身を指差した彼女は右腕に漆黒の焰を纏わせて腰を落とすのだった。

## 9・ゆけゆけ僕達、新ダンジョン進み隊！！（後書き）

リーリア「みんな、おっひさー！！」

カノンノ「今日も元気だね、リーリア♪太陽が眩しいよ、いえーい！！」

リーリア「今日は特にゲストがいないんだっけ？」

カノンノ「そうだね。何か良い暇つぶs……げふんげふん。イベントが出来ればいいんだけど」

リーリア「じゃああとがきで何かコーナー的なやつてみる？ 本編で出番の無い人優先出演でさ」

カノンノ「そうだなあ……でもまあ今までみたいにお喋りでもいいと思うけど」

リーリア「そっかなあ？ それはそれで寂しい気もするけど……まいつか」

カノンノ「それじゃあ、今後もこのオリソロをよろしくお願いします」

リーリア「せーの」

2人「未来へ導け、ココロの光、夢見る翼！！」

## 10・無知故の戸惑い（前書き）

ふう、1ヶ月空いてしまっ前に更新できました。

最近ようやくこちらにも取り掛かれる余裕が出てきましたよ……

では、どうぞ

## 10・無知故の戸惑い

目の前に広がる大きな湖のほとりで、深呼吸を繰り返して身体を火照りを沈めている少女が2人。

「あービックリしたあー!!」

「ええ。まさかここでウィンドスピリッツが大量発生しているなんて思わなかったわ」

巨大な刀身を持つ「バトルブレード」を地面に突き立て抱くようにして立つカノンノと、気持ちの良い風に長い髪を流して杖を握りしめるティアだ。

彼女らはつい先ほど大量のウィンドスピリッツを殲滅し終えたところ。

今は小休止と言う事で休んでいるが、その後ろではジェイドとガイが何やら話合っている。

「んーお腹すいたなあ。シヨコラ、何か作ってくれてると嬉しいかも」

「シヨコラってお菓子作りも出来るの?」

「うん!! シヨコラは体が小さいけどおいしい物いっぱい作れるんだ♪お気に入りにはブルーベリーパイとかミルフィーユとかだよ。すっごくおいしいの!!」

（ちっちゃくて、可愛くて、おいしいお菓子も作れる……………「ごく

り)

満面の笑みを浮かべるカノンノの話を聞いて、目をギラギラさせながら喉を鳴らすティア。

可愛い物に目が無い彼女にとって、シヨコラはひそかに愛でる対象にあつたことをカノンノは知らない。

そんな風にまったりとしていた時だった。

「……—ん」

「カノンノ、どうかしたの？」

眺めていた湖の水面が乱れた。爽やかだった風も若干ぬるくなり、木々がざわめく。

カノンノは笑みを消してバトルブレードを抜き、突然の豹変に驚いたティアを手で制する。

だが、しばらく何も起こらず不気味な静けさの中で水面が揺れ続けるだけ。

「気のせいよ。戦闘の後だから気が立ってるだけ——」

「お願い、少し黙ってて」

落ち着かせるために言った一言が逆にカノンノを苛立たせる。

すると彼女は本格的に腰を落とし大剣を構えて赤い魔方阵を出現させる。

「誰、私達を覗いてるのは。こそこそするのは情けないと思わない

の!？」

「何事ですか。ティア、どういふことなのか説明をお願いします」

「大佐、私にもわからないんです。突然剣を構えたかと思えば湖に向かつてこの状況です」

「大佐もティアも見ろ。湖に波は無いはずなのに……揺れてるぞ」

カノンノの騒ぎに気付いたのか寄ってきたジェイドとガイだが、ガイの方は不気味だと言わんばかりの表情で湖を指さした。

ティア達が戸惑っている間にも詠唱は進み、カノンノは振り上げた左手を前へ突き出すのだった。

「荒れ狂え灼熱、降り注ぎ彼の者を焼き尽くせ!! バーストライク!!!」

降り注ぐ炎の雨。

湖へと吸い込まれるように放たれたそれらは水を蒸気へと気化させ周囲の緑を焼き尽くす。近くにいたジェイド達ですら肌が焼けるかと思うほどの熱量をカノンノは湖へと叩き込む。

数刻の後、バーストライクが収まり蒸気が晴れてきたと思えば、着弾地点の水は沸騰していた。

それと同時に

「うふふ、やっぱり私の事感じ取ってくれたんだね。さすが表の私だ」

一行は目を疑った。

まず、人間が当然のように水面に立っている。そして彼女は似ていた。いや、似ているところではない。

ピンクのショートカット、オレンジ色の太陽をモチーフにした髪留め、華奢な体には似合わない武装である大剣。唯一異なる点がある。とすればただ一つ、翠色の瞳を持つ本物に対して水面に立つ彼女は深い藍色を輝かせていた点だけだろう。

その姿はもはや疑いようもなく――

「カノンノが……………2人!？」

ここ、ウルズ湖でもイザヴェル遺跡と同じ現象が起きていた。

「貴女は誰？」

「私は貴女。この世界に生まれてくる時に必要としなかった部分がカタチを得たのが私と言う存在」

「私の何を知っているの？」

「貴女が持っていない部分を。今の貴女はそれ以上知る必要が無い」

「どう言う事？」

「簡単だよ」

会話はそこまでだった。

直後水面を蹴ってフワリとスカートが浮いたかと思えば、次の瞬間すでに彼女はカノンノの頭上で大剣を振りかざしていた。

「ここで私が貴女を倒して私が本物になるんだから」

刀身が2mはあるであろう大剣だというのに軽々と扱う彼女の放とうとしていた一撃は既にカノンノの反応速度では間に合わない。

直撃

そう悟ってしまったカノンノは思わず目を伏せ顔をそむけた。

が、いつまでも経っても来るはずの痛みが来ない。それどころかよく思い出せば目を閉じた瞬間にガンツと金属同士が叩きつけられ合い擦れる音がしていたのに気付いた。

恐る恐る目を開いてみれば、目の前には男性の背中があつた。

「ガイさん!!」

「た、ただ頼むから早く体勢を立て直してくれないかな！？　とっさに体が動いたけどもう限界がががが………」

一目で戦闘とは別の理由で大量の汗をかいている事が分かるがカノ  
 ノは気付かない。むしろ無自覚にガイを心配しなかなか離れよう  
 としなかったのだ。

「話聞いてたっ！？　とにかく一回離れて！！　頼むからボディタッチは無しの方向でええええええええええ！！」

「ガ、  
ガイさん？」

ぴと

「ふおおおおおおおおおおお！？！？！？！？！？」

カノンノに背中を触れた事で、何やらおかしなスイッチが入ってしまったらしいガイはその場の勢いでカノンノに似た彼女を押し返し遠くへ吹き飛ばした。

「あーあ、ああなったガイはどうしようもありませんね」

「ええ。せっかくですし彼が頑張っている間に撤退準備を済ませましょうか」

「ちょ、ガイさんとか私の偽物とか放置ですか!？」

それを目撃したティアとジェイドは淡々と荷物を集め片していく。一見薄情にも思われるこの行動に驚きを隠せずにいたカノンノだったが、良く見ればガイはわけのわからない事を叫びつつも剣術で偽カノンノを圧倒していた。

「……帰ろっか」

なんだかんだでカノンノもやる気を失くした。

.....

地下深くだと言つのに、地震でも起きたかのようにその空間は揺れていた。

「いつまで避けられるかな？ この高温多湿の空間だと息をするのも気持ちが悪いだろ？」

「う、うるさい。どうしてボクを狙うの！？」

「殺したいからさ。憎いんだよ、この世界も、お前と言つても1人のボクの存在も全て」

「ボクは何もしてない……なにも知らない！！」

剣と楯を持つ剣士スタイルのリーリアにとって、両拳に黒い焰を纏っている格闘家スタイルの偽リーリアは少し相性が悪かったようで、反撃する糸口が中々掴めない。ギリギリで攻撃を避けるので精一杯かつ動けば動くほどこの湿度の高い空間では吐きそうになる上、思考がばやけてくる。

（どうして……ボクは、本当に何も知らないのに……！？）

向かってくる拳を避け、避けきれない攻撃は楯でなんとか防御するがそれもここまでだった。

「うわっ！！」

「リーリア！！」

後退していた先、死角となっていた所に足を出すと運悪く水路の溝

に足を取られ転倒した。  
あえて静観していたリーガルだがさすがにマズイと思ったのか走り出す。

「これで、トドメだ！！ 消えろ、忌々しい光の果实！！」

「させん、飛燕連脚！！」

起き上がるうとするリーリアに向け跳躍する偽リーリアが拳を振り上げ歯をむき出しにして笑った直後、太く、逞しい足が彼女の腹部に直撃し、嫌な音を立てて何度かバウンドしながら飛んで行く。

「ぐええええええ！？」

「リーリア、立てるか？ 一度退くべきだ」

「で、でも……」

「今のお前では勝てまい。時には退くのも勇気だ」

吹き飛び壁に激突した偽物は嘔吐なのか吐血なのか知らないが俯いてゲーゲーしている。

どうやら今のリーガルの一撃がピンポイントで急所に入ったらしく、膝が震えているのか立つ事すらままならないようで体を起こしては倒れる、という事を繰り返していた。

その向かい側、リーガルはようやく起き上がったリーリアを抱きかかえると有無を言わず来た道を戻り始める。

その間のリーリアは、今にも泣き出しそうな様子で目に涙をいっぱい溜めながらもう1人の自分を見つめ続けていた。

（何も聞けてないのに……何もわかってないのに……ただ恨まれて、憎まれるなんて……やだ）

胸を締め付けられるかのような居心地の悪さと、湿度による気持ちの悪さに耐えながら。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その後、追撃の無かったリーリア達はロイド達と合流してバンエルトイア号に帰還。

それとほぼ同じタイミングでカノンノ達も帰ってきた。

「みなさん御無事でなによりです。リーガルさんとジェイドさんは報告をお願いします」

船内に入ると安心したのか大きく息を吐くチャット。彼女はそれぞれのグループの説明を2人に求め、それ以外のメンバーには休むよう伝えて立ち去る。リーリアはかすり傷や擦り傷が多かった為医務室へ。

それ以外のメンバーは自室へと戻るのだった。

「先生、全部先生のせいなんだからみんなに謝つてくれよな？」

「今回はさすがにね……私もロイドに賛成です」

「姉さんは僕達に対してそろそろ上から物を言えなくなってきたって自覚、ある？」

「ホント、ごめんなさい」

ようやく合流できたロイド達とジーニアス達。

自らの教え子から説教を食らうリフィルは、珍しく本当に反省しているようだった。

.....

「もう信じない、なんて言いませんよ。リーリアさんとカノンさん、それぞれに瓜二つの人物が強襲してくるなんて……普通じゃありませんね。それに、生息地を無視しての魔物出現。いよいよ討伐中心の依頼が増えてきそうです」

「ああ。空を移動できるこの船だからこそできるギルド運営を頼むぞチャット。私も知人に声をかけ人員を増やす手伝いをしておう」

「ブライアン侯爵が人員調達に動くのでしたら、私達は現地調査に精を出しましょうかね。もちろん王女の搜索も並行しつつ、ですが個人的な知り合いにも声をかけてみましょう。何かわかるかもしれませんね」

その頃、チャットの個室ではリーガルとジェイドの報告を受け表情を凍らせるチャットと、個人的にも協力を申し出るリーガル達だった。

前向きな発言にもかかわらず、3人の内誰1人として表情に余裕が無い。

こうして報告をしている間にも、世界のどこかで戦争により人が死に、魔物により人が死ぬ。

世界は刻々と余裕を失くし始めていた。

.....

その日の夜

船の甲板にて剣を振るう男がいた。

鳶色の短髪を揺らし、細く長い、されど存在感溢れる剣を手に舞う。

「クラトスってさ、毎晩そうやって剣を振ってるわけ？」

「……………」

剣を振っていた彼、クラトス・アウリオンは沈黙でその問いに応える。

「別に文句も何にもないけどさ、虚しくないの？」

「孤独の虚しさなど、己への甘えにすぎん。人は皆孤独だ」

「だからこそ他人との関わりを欲する。そう言いたいわけ？」

「分かっているなぜ問う？」

「アンタ、そう言う割にこここの連中から遠ざかろうとしてない？特にリーリアとカノンノ。それにロイドもか」

「……………私は傭兵だ。依頼で必要に応じて共闘するのが仕事だ」

「アンタ、何者？めんどくさいの嫌いなよ。ルカみたいにイジイジしてない分マシだけど、アンタも相当裏があるわね」

「去れ。私を知ったところでお前には何のメリットも無い。時間の無駄だ」

そこまでで会話を打ち切った彼は再び剣を振り始める。

その動きはリーリアやリッド、ロイドのような剣士とは比べ物にならない練度だと素人でもわかるほど。

まさに舞いだった。

彼女は諦めて甲板から姿を消す。

残ったのは彼と、雲の上に広がる済んだ空気。

「思った以上に勘が良いのか……警戒が必要か？ この世界”グリ  
トニル”のイリア・アニーミ」

そして、たった一言の呟き。

## 10・無知故の戸惑い（後書き）

リーリア「偽物が強い件について」

カノンノ「ガイさんの様子がおかしいんですけど」

ファラ「うーん……リーリアはクラトスへの弟子入りがどうこうって言うてたよね？　ガイさんは……謎、だね」

リーリア「そういえばファラは久しぶりの登場じゃない？」

ファラ「そうなんだよー。私まだ依頼とかで出た事無いんだあ。なんでか影が薄くて……」

カノンノ「いつか良い事あるって。イけるイける……！」

ファラ（台詞もパクられた……！！）

カノンノ「そう言えば、作者さんの話だと今回で第1章を終わらせちゃうらしいよ」

リーリア「まだ何にも始まってないような始まってるような……」

ファラ「判断は読者のみなさんにお任せと言う事で」

リーリア「それじゃ、今回はこのへんで」

カノンノ「ファラ、締めをお願い」

ファラ「うん♪ 未来へ導け、ココロの光、夢見る翼!!」

カノン「感想、質問、まってまーす♪」

## 11・リーリアと言つ存在（前書き）

書けたあ!!

連載していた作品がようやく落ち着いたので今後はこちらまぼちぼちやっていこうと思います。

挫けそうでしたけど、今後もしっかりお願いしますm——（m

## 11・リーリアと言つ存在

リーリア、カノンノの2名が自身と瓜二つの人物と交戦して1ヶ月ほど経った。

その1ヶ月の間はどこへ行っても向こうから姿を現す事も仕掛けてくる事すらない。

いたって安全かつ何も無い日々だった。

その上ここしばらく目立った異変も無ければ注意すべき依頼も無い。ただ日々依頼をこなし、アドリビトムの名を着々と世界に知らしめているだけだった。

そんな中でも世界情勢は日に日に変化し続けている。

遂にこう着状態にあった戦争が動き始めたのだ。

結果としてはやはり軍勢力に長けたグレルシールがエルナを押している。

さらに引き続いてナタリア王女の所在はいまだ不明のまま。

「以前から気になっていたんですが、リーリアははじめからこのギルドにいたのですか？」

「いえ、アドリビトム結成の数日後に参加したんですよ。にしても貴女が彼女に興味を持つなんて珍しいですね、ジェイドさん」

「いえ、最近思っていたのですが私達はあまりリーリアの事を知らない……と思ひまして」



「暇だよねえ」

リッドもファラも、始めはやる気などなく行くあても無く移動するバンエルティア号の甲板でのんびり過ごしているだけだった。

来る日も来る日も、天気が良ければ甲板で景色を眺め、悪ければ船内で談笑する。

ごく稀に来る依頼なども、簡単に面白みの無い物ばかりですぐに終わってしまっていた。

「アドリビトムって名前がおかしいのなあ？」

「いいんじゃないの？ 自由って俺たちらしくてさ」

ある日、ファラがふと言った一言。

それはアドリビトムの存在があまりにも小さいのではないだろうかと言う不安から出た一言だった。

ギルドを発足させたまでは良かったが、その後の事をあまりよく考えていなかったのだ。

ただ”大丈夫、イけるイける”としか思っていなかった。

実際

（大丈夫じゃねーよなあ……）

なんとかしたいのはリッドも同じ。だが、何をどうすればいいのか見当もつかない。

それでも、行動を起こさずにはいらなかった。

「リッド、依頼が無いなら自分たちで探すしかないよね!!」

「はぁ!?」「冗談だろ……勘弁してくれえ」

ファラに首根っこ掴まれ引きずられる彼は甲板から船内へ入ろうと  
していた。  
その時だ。

運命が、動き始めた。

「ファ、ファラ!!」

「何よ」

「うつつ、上!!」

「はぁ?」

リッドが驚愕した表情のまま空を指差す。続いて彼女もその指差した先を見て、目を疑った。

「え……………ええ!?!」

ドンッ

と、大きく鈍い、痛そうな音を響かせて甲板に降ってきたのだ。

「い、痛い……………」

どこからどう見ても人間の形をした女の子が涙目で。

……………

「これが、この船とリーリアさんの最初の出会いです」

「あの子は空から降ってきた、と言っているのですか？」

ジェイドは思わず笑い飛ばしそうになったが、チャットの表情があまりにも真剣な為出来なかった。

笑いはいなかったが彼はチャットから聞いた話を信じてはいない。というより普通信じない。

人が空から降ってくるはずが無いのだ。信じられないと言っているのは当たり前のことだろう。

それでも、少なくともリッド、ファラ、チャットは信じていた。

「僕も最初は信じませんでしたけど、よく考えたらそれしかつじつ

まが合わないんですよ。なぜなら、その時バンエルティア号は海面……つまり割と高高度を飛行中だったんですから。だから途中で乗船してくるなど自分の飛空艇みたいな物を持っていないと乗船どころか接近すら不可能だった」

「リーリアは……その全ての条件を無視してこの船に訪れた、と？」

「そう言う事です。その上彼女は記憶喪失なのか自分の名前しか憶えていませんでした」

そこまでを知ったジェイドはある1つのおとぎ話を思い出していた。それほど具体的な内容ではないのだが、妙に頭の中に引っかかっているお話。

世界が危機に陥った時に現れる救世主。

救世主は持たざる者のみが持てると言われている無限の可能性と恐れぬ心を持っているらしい。

救世主は何を持たない事で、その可能性と心を勝ち得ているのだろうか。

（つと、おとぎ話に想いを馳せるなど……私も年をとったんですかねえ）

食欲がなくなっただけではないがジェイドは食器を片づけ始める。単純に食べ終えただけだ。

そしてその行為を合図に話を打ち切る、とチャットに間接的に伝えたのだった。

.....

さて、と呟きながらジェイドは割り当てられた自室へと戻る。

その部屋にはいくつもベッドがあるが、同室なのは今のところガイだけだ。

そしてそのガイも今は依頼を受けて出かけているのかここにはいない。

「調べて……確かめる必要があるのかもしれませんがねえ」

「誰を調べるんですか？ ジェイド・カーティス」

誰もいなかった。

部屋に入ってきた音、様子は一切無かったはずだ。

なのに、ふと漏れた呟きに言葉が返ってきた。

振り返れない。どうしてか、体が動いてはくれなかった。

「その声は……！！」

「私の事はいいんです。それより、誰を調べようとしていたんですか？」

「え、ええ……以前から観測されていた魔物の出没エリアの――」

「正直に。私は誰を、と聞いたんですけれど」

背筋にこれまで感じた事の無い寒気が奔る。全身からよくない汗が噴き出している感覚。

凍った手で心臓を驚掴みにされて無理やり鼓動させられているような、全てを見透かされている感覚。

ゴクリ、と喉が鳴った。

「リーリア……ですよ。聞けば、彼女が現れた事でこのアドリビトムは存在を一気に大きくした」

だから、素直に答えるしか選択肢が無かった。

「だから？」

「偶然だと思いますか？ 私はそんなもの信じません……起こりうる事には全て理由があるはずではありませんか？」

「グリトニルのジェイド……貴方は聡いですね。イリアと同じ……可能性を持っている」

ジエイドは彼女が言っている事の意味を理解しかねていた。彼女を理解するには現段階では情報が足りなさすぎるからだ。彼が恐怖に似た感覚を味わっているのに対し、彼女の声はどこまでも優しく落ち着きのある物だった。

「仲間を集めなさい。志を同じくする者達を探しなさい。貴方達の灯は、世界を照らすにはまだ小さ過ぎる」

「どう言う事です!？ 私達に何をさせようと言っんですか!?!」

すると、初めて彼女の声に笑みが含まれた。

「ふふ……私に吼えても無駄ですよ、ジエイド。もう、時間が無いのです」

「今の私達には情報が少な過ぎる……教えてくれませんか!？」

「リーリアとセンチュリオンの王に尋ねなさい。そして、私の古い友人と精霊の守護者に」

「センチュリオン？ 古い友人？」

全身の硬直が解けてきたのがわかった、彼はすぐに振り返った。  
振り返る事でどうなるうが、彼は構わず彼女の姿を確認したかった  
のだ。

そして、見た。

ピンクのロングストレートに純白のドレスを思わせる清楚なワンピース。  
白く透き通った肌が眩しい中、ジェイドに向けられている開かれた  
瞼の奥に煌めく翠色の瞳。

「な——」

言葉が出なかった。

予想をはるかに上回る圧倒的存在感。

絶句していたジェイドを余所に彼女は部屋から出てゆく。  
開いていた扉が閉まる直前、振り返っていた彼女は、小さく微笑ん  
でいた。

「頑張って」

ただそう言い残して、彼女は姿を消した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「お前が動いたと言う事は、本当に時間が無いのだな」

「はい。その内この世界のみなさんがお見えになると思いますよ」

「全く、これだから人間は愚かだと言われるのだ。人間のほとんどは自分で生きようとしないう家畜同然。吐き気がする」

「まあまあ、そう言わずに。あと1ヶ月ほどで恐らくグレルシールがエルナを占拠するでしょう」

ジェイドが驚愕し部屋に取り残された直後、全く別の場所に彼女はいた。

一人の男性と共に。

「そしてグレルシールが世界樹を傷つけ世界の崩壊が加速する……か。よもやひと月も残されていないとは」

「それだけじゃありません。ディセクター……世界中の光と相対する者が既に動いています」

「なんだと!？」

彼女の言葉を聞いて男性は表情を一変させた。

彼が狼狽する姿が珍しいのか少し興味ありげに男性を見ている彼女だが目は真剣だった。

「世界の負が動き出していたか……ならば、一刻の猶予も無い」

彼は呟くとその場を後にするかのようにはスタスタと立ち去ろうとする。

唐突な行動だと言っのに困った様子ひとつ見せない彼女は彼の姿を目で追う事も無く問う。

「どこへ？ 貴方がここを離れては、誰が精霊達を守るのですか？」

「フツ、舐めるなよ。この周辺はセルシウスのテリトリーだ。心配などしなくても済む」

「そうですね……では改めてお聞きしますが、どこへ？」

「俺が行ける範囲で直々に歪みを叩く」

2人の間では、言葉はそれだけで十分だった。

彼は装備を整え、この土地に住みついていた精霊達と別れを告げる。

その横で、彼の言っていた精霊……氷の精霊セルシウスが立っていた。

「追いかけてあげる」

「来なくていい。むしろ来るな」

「この景色、見飽きたのよ」

「少なくともそれぞれの土地を守る精霊が言う言葉じゃないな」

セルシウスは笑っていた。

彼もまた、笑っていた。

「気をつけて。魔物たちが騒がしいから」

「わかった」

そのまま彼は、セルシウスと彼女を残してさっさと吹雪の中へ姿を消した。

残されたセルシウスは空を見上げ、彼女はと言うと申し訳無さそうに苦笑している。

「大変な役目ばかりですみません、リヒターさん」

そう呟きながら。

## 11・リーリアと言つ存在（後書き）

チャット「今回はリーリアさんもカノンノさんも出ていません」

ジェイド「というわけであとがきは我々で進行していきまーす」

チャット「それにしてもジェイドさん……危ない橋渡らないでくださいよ？」

ジェイド「だが断る」

チャット「なん……だと!？」

カノンノ「って2人共キャラちがーう!!」

チャット「あ、やっぱり戻ってきましたね」

ジェイド「やっぱりこのコーナーはカノンノがいた方が華がありますねえ」

カノンノ「なんかまんまと嵌められた気がする……ま、いいや。チャット、最後お願い♪」

チャット「はい。未来へ導け、ココロの光、夢見る翼!」

ジェイド（死にたくはありませんね……）

カノンノ「あ、最後に出てたあの人の紹介忘れてた……まいつか」

12 進むしかない道（前書き）

クラトス、かわいいよクラトス  
www

## 12・進むしかない道

人が置かれている状況が変化するきっかけとは、時にほんの些細なできごとだったりする。

そして今回の件であれば、それは”目撃情報”だった。

「で、私達が招集された理由をお聞かせ願いますよ、キャプテン」

「ジェイドさん、なにを苛立ってるんですか。ああ、そんなに睨まないで」

「じゃあさつさと教えてくれればいいーじゃん」

「ナタリア王女の目撃情報が先ほど入りました」

バンエルティア号のホール、集められたジェイド、ティア、ガイ、アニスの4人は驚きに目を見開く。  
一番驚いていたのはジェイドだった。

「まさかこのタイミングですか？ 罨…… かもしれませんね」

「けど手がかりが何も無い以上、飛び込んでみるしかないだろうな。たとえ罨だとしても」

顎に手を当ていつになく真剣な表情で呟き始める彼をよそにガイは呆れた様子で行く意志を示す。

彼の考えにティアもアニスも賛成しているようだった。

「ジェイドさんはどうしますか？」

「私は……船に残ります。別件で気になる事がいくつかありますから」

「大佐……どうかなされたんですか？」

「雪が降るんじゃないか？」

「トクナガが降るんじゃない！？」

「ですので、私の代わりにリーリアがカノンノを連れていってください」

一同はこれまた驚いた。

周囲の意見など聞く耳持たず、なのかジェイドはそのまま船の奥へと姿を消す。

残されたメンバーはしぶしぶカノンノを連れていくことにした。

………

「で、どうしてみなさんはリーリアより私を選んだんでしょうか」

沢山の足音を響かせながら一同が歩くのは、湿った草木の臭いが立ち込める廃抗。

グレルシール帝国とエルナ王国の間、イザヴェル遺跡から北西に

進んだ位置に掘られた場所だ。

名前はジーンガル廃抗。

昔はマナを豊富に含む鉱石を採る事ができたのだが、現在は掘り尽くしてしまったのかも出ないだろうと思われ破棄された場所。そのため凶悪な魔物がはびこりより一層人が立ち入れない場所となっていた。

「ガイさん、答えてくれないと抱きつきますよ？」

「頼むからそれだけは勘弁してくれ。理由はまあ以前にも共闘したことがあるからって感じた」

「メンバーを選ぶのなら戦闘スタイルを知っている人の方が安心できるという点もあるわね」

「女の子ばかりにして困り果てるガイを観察するっていう遊び心もあつたりする」

「鬼かお前達！？」

「むゝ、リーリアが可哀想だよ」

投げかけた質問を軽くかわされてしまった事に若干の不満を覚えつつもカノンノは進む。

ティアは相変わらず正しいと思う事を素直に述べ、アニスは相棒の人形トクナガに乗りながらガイをいじめていた。

4人の内ガイ以外が女性と言う、男性なら誰しもが望み、羨ましくもけしからん状況だというのに彼は脅えていた。

「は、早く調査して帰ろう!! うん、そうすべきだ!!」

これ以上いじめられたり弱点を突かれるのが嫌な彼は、逃げるように廃抗の奥へと進んでいく。

カノンノ達はクスクスと笑いながらも彼を追いつめてゆく。

「そういえば、もう一つリーリアを選ばなかった理由があるわ」

「え、なんです?」

「あの子、今はきつとクラトスと一緒にしておでかけじゃないかしら」  
小さく笑うティアの言葉に、カノンノは目を丸くしていた。

.....

その頃、お留守番だったはずのリーリアはイザヴェル遺跡に来ていた。

「で、ボクはどうしてクラトスと一緒にしておでかけなの?」

「修行の一環……そして、対となる存在に相對したお前は知らねばならん」

「クラトスの言葉ってよく分かんないよお」

「今はそれでいい。今のお前は、体験した事全てを吸収してゆく乾いたスポンジのような存在なのだからな」

クラトスに引率されるように訪れた彼女はこめかみを押さえ唸りながら彼の後についてゆく。

2人は以前リーリアが訪れた地下空間に向かっていた。

案内を必要としないままクラトスは当然のように先頭を進んでゆく。

「ところどころ階段が崩れている。躓かぬよう気をつけろ」

「はい……っと、うわっ!？」

「む、言っている傍から……握れ」

「なんか、やっぱりクラトスはあつたかいね……ありがとう」

「!?!」

階段を下りていたリーリアが躓き転びそうになったのを受け止めたクラトス。

彼はリーリアに手を差し出しその手を掴んだ彼女の小さな手を優しく握りしめていた。

微笑むリーリアの言葉に驚きを隠せなかったクラトスは声を押し殺して進むのだった。

しばらく降りてゆくと、当然ながら以前のままのイザヴェル本殿が現れた。

「どれだけの時を経ようと、この神域だけは姿を変えず在り続ける」

「神域？」

「ここは私とお前、そしてカノンノにとって深い縁のある場所。覚えていないはずもないだろうがな」

「うーん……やっぱりボクってクラトスと知り合いだった？」

（「やっぱり」……か）

彼はリーリアの問いに答える事無く本殿の滝へと近づいてゆく。そして滝壺のようになっていた泉の正面に立つと、クラトスは剣を抜いた。

「古の盟約により、ここに幾度目かの真実を要求する」

呟き、その手の剣を泉の底へと投擲した。すると泉が割れて滝が左右にずれてゆく。

現れたのはさらに地下へと続く階段と深い闇だった。

「行くぞ。この先でお前は試され、真実を知るに足る存在か否か判断されるのだ」

「ボク1人で？」

「私も行く。そう不安そうな顔をするな」

「うん」

（――フツ）

先に階段を数段降りて、突き刺さっていた剣を抜き鞘に戻していたクラトスは振り返る事無く説明を述べる。

共に行くと言われたリーリアは頬を緩めて彼の後を追いつ、今度は自分から彼の手を握りしめた。

手から伝わるぬくもりに、彼が優しげな眼差しを彼女に向けた事は誰も知らない。

.....

そして再びカノンノ達。

彼女らはジーンガル廃抗にてナタリア王女が目撃情報があったと聞いてここに来ていたのだが、情報にあったポイントにはまだ到達していなかった。

「まだ着かないのか……」

「思ったより深い位置が目撃場所になっているみたいね。でもここまで深いとこの情報も怪しいわ」

「だね。情報提供者って確か戦えない普通の人でしょ？ そんな人がここまで来るなんて考えにくいし、目撃したとしてもそこから当然のように生還してわざわざうちのギルドに報告するなんておかしい」

ガイ、ティア、アニスが揃って表情を引き締め一度立ち止まる中、カノンノは上の空だった。

「カノンノ、大丈夫？」

「……」

「カノンノ？」

「……………あ、えつと……………なんででしょう？」

ティアの声にはじめは反応を示さなかったが、2度目には急に息を吹き返したかのような反応で答えた。

不安な要素が次々と増えてくる中、これ以上進むべきかどうか悩んでいた3人にカノンノが動く。

「進みましょう。畏だったとしてもこのまま帰ったんじゃ何も分からないままです」

「次ボーツとしてたら置いていくからな」

「ガイもね」

「はいはい、進むなら余計な体力は使わない方が良いでしょう」

歩き始めた彼女の後にガイが続き、さらにその後ろをアニスが苦笑しながらついていく。

ティアは一番後ろから3人を見つつ、疲れを見せないカノンノやアニスに呆れていた。

先頭を歩くカノンノは、後ろでのやりとりなど全く気にしないで歩き続ける。

（足の……足元のさらに下、凄く嫌な感じがする）

それは例えるなら何かが蠢いているような感覚。

自分の足が、地面では無くブヨブヨした不安定な場所についているような不快感。

（私の偽物の時とは違うこの嫌な感じ……知ってるような、知らないような、よくわからないよ）

どんな物を感じても、進むしか道は無い。

何かを得るには、無難に済む道を進んではいけないのだ。

（でもこの感じ……私の探してる記憶のヒントかもしれない）

さらに下層へと続いてゆく道を進んでゆく。

少しずつ響き始めていた本当に微かな地鳴り。

「王女がこんなところに連れて来られたりするもんか？」

「さあ……誘拐犯の趣味や思考によるんでは？」

「どーでもいいけど、さっきから地震みたいな揺れが気になるんですけどー」

「生き埋めとか嫌——だ!？」

直後、微かだったはずの地鳴りが空間に響き渡り本格的な地震となった。

先ほどまで何事も無かったはずなのに、突然足元に亀裂が奔り碎けて崩れ落ちてゆく。

苦笑していたカノンノの表情は、一瞬で青ざめ重力に従い瓦礫と共に深い闇へと吸い込まれる。

「ガイさん——!！」

「カノンノ——ッ!？」

名前を呼ばれ伸ばされた彼女の手。

ガイはすぐに反応した。

だが、ただ一瞬の迷いが救いを求める少女の手を取れなかった。

この状況下でさえ、彼は女性に触れる事が怖かったのだ。

「くっそお、カノンノ——ッ!!!!!」

あまりに突然の出来事過ぎて見ている事しか出来なかったティアと

アニス。

2人は目の前に空いた穴の底を見つめ膝をついていたガイを、黙って見つめる事しか出来なかった。

どんな言葉をかけたとしても、彼を傷つけてしまいそうだったから。

彼は、息を忘れるほどの後悔に身を凍らせていた。

## 12・進むしかない道（後書き）

お久しぶりです、暇人です。

今回もまた更新が遅れてしまい、楽しみにしている方々には深くお詫び申し上げます。

今作は割と速いテンポでシナリオが進んでいく予定です。

今後もどうぞ、よろしくお願いします♪

### 13・気付いてほしかった事

ジーンガル廃坑の奥深く。

ガイ、ティア、アニスの3名は先ほどの大きな地震により崩落した通路を迂回して移動を続けていた。

彼らの目的はすでに、元々のナタリア王女目撃証言の真偽を確かめる事からはぐれてしまったカノンノの搜索へとすり替わっている。

「ガイ、あまり先行しないでください」

「気持ちは分からなくもないけどさ、急いでガイが怪我したらきつとカノンノは余計心配するよ？」

ティアやアニスの忠告になど耳を貸さない、と言うわけではない。先ほど犯してしまった自らの過ちと、それに対する後悔、カノンノへの罪悪感で頭が一杯だったのだ。

（俺のせいだ……俺がカノンノの手を取れなかったからあの子は！）

今もまだ、落ちてゆく彼女と目があつたあの瞬間がはっきりと浮かんでくる。

互いに手を伸ばしたはずだったのに、自分の二ガテ意識を理由に見捨ててしまった。

「あいつが俺を心配するしないは関係ないさ。ただ、俺の気が済まないだけだ」

「本来の目的も忘れてはいけないわよ。ナタリア王女を目撃情報の真偽を確認することの忘れないで」

（にしてもここまで女性に必死なガイは見たことないかも）

ガイは後方のティアの言葉に聞く耳を持たずひたすら歩いてゆく。そんな彼の背中を見たア二スはいつもと違う雰囲気を感じ取り改めて彼のまじめさに息をのむ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

パラパラと細かな音を立てて石や砂が少しずつ降ってくる。

右も左もわからない暗闇の中で、落盤により崩れた足場から下層へと落下したカノンノは目が覚めた。

「なんにも見えないんですけど……しかも埃っぽいというか砂だらけえ」

手元に自身の武器である大剣があるのはわかる。持ち歩いていたのだから共に落下したのは必然なのだろう。同時に服装などにも乱れは感じない。

ただ、肉体面において一部違和感があった。

「痛つ……」

左肩に強烈な痛みを感じていたのだ。

目覚めたとき体の左側が地面についていたことから落下の衝撃を体の左半分で受けたのだと推測。

小さく舌打ちをしながらも彼女は右手でファイヤーボールを発動させ適当に壁にぶつけてみた。

ガラガラ、と音を立てて岩盤が崩れる音が響く。

「ラッキー……とりあえずこれで酸素の確保はできるみたいだ」

今いる空間が閉ざされた場所でないことを知り安堵すると、今度はスカートを少しちぎってたいまつを作る。

魔法で点火して視界を得ることで安堵感はさらに増し、そのまま左半身を引きずるようにして移動し始めた。

「ガイさん、自分を責めてなければいいんだけど……まじめだしなあ」

右手でたいまつを持ちながら腋で大剣を引きずる状態は想像以上に体力を使う。

体が小さいカノンノにとって今の状況は最悪と言わざるを得なかった。

それでも今は行く先を考える前に移動し続けることしか選択肢はない。

「私……ガイさんが女の人苦手だってわかっててガイさんに手を伸ばしてた」

悪いのは自分なんだ、と何度も何度も言い聞かせる。

この肩の痛みは、今ガイが抱いているであろう後悔や苦痛の代わりとなるものではないか、と思いつながら。

「それにしても寒いよお。湿っぽいし」

歩き続けているうちに感じられるようになってきたこの空間の特徴。異様に温度が低く、土壁には植物が茂っている。

足元は少し水気を含んでいるのか柔らかく、目を凝らすと水たまりも確認できた。

（地図しか見てなかったけど、確かこの廃坑の南にはイザヴェル遺跡があったよね……）

だが、あそこは確かただの風化した遺跡だったはず。

以前ロイド達とリーリアが向かった事は聞いていたが詳細まで聞きはしなかった。

しまった、と後悔しつつ前へと進み続ける。

「まさか、遺跡の地下に繋がってる……なんて事はないよね」

それはそれで大発見であり、同時に大問題である。

何が問題なのかというと、はぐれてしまったガイ達との合流が困難になるかもしれないということだ。

進むべきか、それ以外の道を選ぶべきか。

肩の痛みがあらゆる感覚を塗りつぶしていくような不愉快さを広げていく中で、カノンノは思う。

（こんな時、リーリアならなんて言ってくれるのかな……）

まだ知り合って間もないはずの彼女の存在が、なぜか彼女の胸の中で大きくなっていった。

理由はわからない。

ただ、初めて彼女を見たときから感じていた既視感デジャヴがあまりにも強烈だったのだ。

「失くした記憶に、絶対あの子は関係してる。だから、記憶を取り戻すまで私は死ねない！！」

それが、今のカノンノの精神を支える原動力の最も大きな割合を占めていた。  
その思いを抱いて、意を決したカノンノは改めて奥へ奥へと歩いていく。

.....

「改めて思っただけけれど、この状況はでき過ぎじゃないかしら」

「ティアっては何言ってるの？」

ガイを追いかける形で廃坑をどんどん進んでいく一向の真ん中でティアが顎に左手を当てて呟く。

そんな彼女の言葉にアニスが首をかしげながら進んでいくがやはりガイには聞こえていない様子。

「ガイ、これ以上進むのは罨かもしれません」

「だったらなんだ」

「一度引き返してそれなりの装備を整えてから、カノンノ搜索と任務内容を改めるべきでは？」

「それじゃ遅いかもしれないだろ！？」

罨かもしれない、という言葉にようやく反応を見せたガイだが、ティアの提案には拒絶を示した。

明らかに冷静さを失っている様子に彼女は諦めたかのようなため息を漏らした。

しかし、ガイの言葉は拒絶だけでは終わらない。

「落ちた勢いでカノンノが怪我してたらどうする！？ そのせいで魔物に出くわしてやられでもしたら……俺は誰に謝ればいい！？ 目の前で助けてって手を伸ばしたカノンノも救えないような人間が誰を助けられる！？ 俺はそんな情けない軍人になつた覚えはない！！！」

彼はこの短時間で恐ろしいほど後悔したのだろつ。

声だけで彼が泣いていることが手に取るようにわかつた。

「アニス、ガイと一緒に進んでください」

「あれ、ティアはどうするの？」

「一度戻つて応援を呼んできます」

ティアは振り向かずにガイをアニスに任せてきた道を駆け戻っていく。

彼女の唇がギュッと閉じられていた。

（あんな必死な思いを聞いたら……止めさせられるわけないじゃない）

ガイがあればカノンノの手を掴み損ねたことを後悔していたとは思ひもなかったティアは胸が痛んだ。

ただ純粹に、彼の思いを踏みにじったような感覚を抱いてしまったから。

（カノンノ……無事でいて）

だから、ガイだけでなくカノンノのことがより一層心配になった。

別れたティアを気にする余裕もないのかガイは再び進み始めていた。そんな彼の背中をアニスはまだ追いかけるだけ。

「ま、待ってよ!!」

「……………」

ゴツゴツした岩が突き出している危ない足元なうえ、暗い視界。

ズボンにブーツなガイならまだしも、肌が露出しているアニスには危ない事この上ない。

すると、やはりと言うべきか

「あ、ぶっ!？」

飛び出していた岩の先端に足を引っかけてしまったらしいアニスが派手に転倒した。

「うぐ、うう……」

ただでさえ暗い洞窟で、いつもと様子の違うガイ。

この廃坑に入っただいぶ経ったことでアニスには相当な精神的負担があった。

そのせいか痛みが倍増したように感じ、声を押し殺して泣くことでストレスを吐き出そうとする。

だが、やはりそれだけでは吐き出しきれなかった。

「ううう……うああん!!」

「!？」

突如声を上げて泣き出したアニスにさすがのガイもギョっとして足を止め振り返る。

「ど、どうした」

「ガイが悪いんだよお!!」

「はあ!？」

血が出る足を抑えながら寄ってきたガイを叫びながら叩く。

いつも元気なアニスは軍人をしているとはいえ、やはりこういう時は年齢が出てしまう。

「一人で責任全部背負って、ぐず……うぐ、自分が悪いみたいな、うぐ、風に考えて……」

「ま、まずは止血だろ。くそ、ティアがいれば……」

傷を負った部分を触られアニスはさらに泣き声を大きくする。

「見たことない怖い顔して……えぐ、う……何言っても怒鳴られて……」

「悪かった、悪かったから……」

「カノ、カノンの事も……う、うあ……助けられなかったの、私たちも……同じなのに……」

「——あ」

ガイが硬直した。

それと同時にアニスは彼の胸ぐらを掴み自分の額を押し付けて怒鳴る。

「1人で勝手に私達の分まで責任背負うなあ!!」

もう、ガイはわかっていた。

この短時間に自分がどれだけアニスとティアに不愉快な思いをさせていたのかを。

カノンノの手を取れなかったこと、彼女を助けられなかったことに対する責任を勝手に自分だけのものにしてしていたこと。

それは、その場に一緒にいた2人を蔑ろにしていたのと同じだった。

「……………悪かったよ、アニス」

「バカ、バカバカ…………」

女性が苦手なはずのガイが、今は無意識にアニスを抱きしめていられる。

この少女が、こんなにも暖かいのだと彼は初めて感じていた。

数分経ち、そろそろ痛みも引いてきたと判断したガイはアニスを立たせどうするかを考え始めた。

「歩けるか？」

「……………なんとか」

歩けない、とは言っていないもののふらついている様子から痛みが酷いのは一目瞭然。

カノンノを探すため進みたい気持ちと、アニスに無理をさせたくない気持ちとがせめぎ合う中、再び廃坑内が揺れた。

「また崩れるのか……………!？」

「ガイ…………」

同じ過ちを2度繰り返さないためかガイはアニスの手を握り引き寄せる。

ガイの体に触れた彼女のあ、と漏れた言葉は、地響きのおかげで幸か不幸か彼の耳には届かなかった。

その後しばらく続いた揺れが収まるといやに静かな時間が続く。

それはまるで

「嵐の前の静けさ……だな」

「それってもしかして戦闘イベントフラグじゃ……」

すると、ありもしない期待にこたえるかのように2人の前方の足場に大きな穴が開いた。

現れたのは巨大な岩が連なってできたような形をした生き物。

「おいおいおいおい、コイツはまさかロックワームか!？」

「はうあ……今の装備と人数じゃ1体でもヤバいかも……」

岩相手に対抗できる可能性のあるアニスは負傷中。

そしてガイには剣しかない。

相性、状況は最悪だった。

だが、やるしかない。

「くそ……アニス、下がって岩の陰に隠れてろ」

「でも、それじゃガイは……」

なかなか離れようとしないうにアリスを無理やり岩陰に押し込んだガイはロックワームへと突進した。

「もう目の前で誰かが怪我したり泣くようなことにはしたくない！  
！ 俺が、守る……！」

ガイ・セシルは、吠えた。

### 13・気付いてほしかった事(後書き)

ぎゃあああああ!!

1か月全く更新無しですみませんでしたあorz

今月は全くインスピレーションが湧かず……いや、言い訳はよそう。

すみませんでしたm(\_\_\_\_\_)m

アニス「ホントだよ、全く。しかもなんか私とガイの様子が!?!」

ティア「前回でカノンノ×ガイ的な雰囲気を見せたくせに」

ガイ「はひ!?　なんて俺がジト目で睨まれるんだ!?!」

ルーク(俺、まだ出番どころか名前も……アビスの主人公なのに)

リーリア「次回はまさかの参加者追加!?!」

クラトス「ガイが漢を魅せるそうだ」

アニス「それじゃ、次回もまた読んでね」

ティア「未来へ導け、ココロの光、夢見る翼!?!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1832r/>

---

TOW オリジナルマイソロジー

2011年11月15日18時05分発行